
神がここにいる

小田 浩正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神がここにいる

【Nコード】

N0305BA

【作者名】

小田 浩正

【あらすじ】

この作品は1/1から、1/7の1週間だけと言いましたが、1ヶ月間は掲載することを決めました。

<あらすじ>

僕が昨日から困っていることと言えば、

明日が来ないことである。

…えっと、「はやくあしたがないかなあ」などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないのでしょ…。
なんでこんなことを考えているかという、僕に降りかかった不幸のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまつて、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかった。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかった。

神様その他もろもろ出てくるハチャメチャなストーリーが始まります。

<宣伝>『電車内は人の心』もよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

この作品、結構面倒です。

神様やその他もろもろ出てきます。

ハチャメチャなストーリーが始まります。

どうかよろしく願います。

あと、感想もよろしく願います。

プロローグ

僕が昨日から困っていることと言えば、

明日が来ないことである。

…えっと、「はやくあしたがこないかなあ…」などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないので…。

なんでこんなことを考えているかというと、僕に降りかかった不幸のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまつて、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかった。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかった。

「きやあああつあああつあああああああああああああああ！」

いきなりですみません。ちょっとヤバい事態が僕の目の前で起きていたので。

僕の叫びを聞いてしまった近所の方。ホント、すみません！

僕の部屋の壁は意外と薄いので、外からの騒音が良く入ってくるのです。なので逆に僕の叫び声も近所に響いてしまうのです…たぶん女の子の叫び声ならいいのですが、実際は、高音を喉から無理やり出そうとしているので、聞いてしまった方々は朝から不快にしまつたでしょう。ホント、すみません…。

第1話 第1章（前書き）

最初からぶっ飛ばします！

感想よろしくっ！！

第1話 第1章

さて、状況を説明します。

昨日、僕にとつて今まで生きてきた人生の中で、一番の試練に会ってしまいました。そのため僕は、今までにない疲れを感じ、そのままベッドで寝てしまいました。なので、寝巻を着てない。風呂にも入ってない。もうそろそろ、秋だというのに、昨日の夜は残暑なのか、暑かった。

すこし汗を書いているのか、体にシャツが張り付いて気持ち悪い。

「風呂に入ろうかな」

ちよつとずつ鈍い僕の頭がゆっくりですが動き始める。

さっきの叫び声の前あたりに戻りますが、あることに気づいたので。寝ていたはずのベッドから、落ちているのです。近くに最近買ったマンガも落ちている。元々、寝像は悪い方なので自分でベッドから落ちてしまったのではないかと、考えて目をこする。

窓のカーテンからさす日差しに、まぶしさを感じながら、ベッドの上を見たのです。このままの展開ならば…

窓からさす光を浴びて、神々しい姿で寝息(?)しているかわいらしい女の子が、すやすや寝ている

という具合だと思います。

しかし、僕のベッドに寝ているのは…。

「なにやってんだよ！そんなところで お ば さ ん が寝てんなんて！」

そこにいたのは、だいぶ張りのなくなった頬、唇は不健康さが目立つ感じのすこし紫色に近い。完全なるおばさんがそこにいた。

「……んっ。どう……したの……？朝から……うるさいっ」

僕の悲鳴と怒声で起こしてしまったのか、少し伸びをしてこちらを見た。声がかすれている。絶対寝不足だろと思うぐらいまぶたが重そうである。

「目が覚めたか？そんなじゃあ、ゴーアウト！」

「……？横文字は弱いんだぞ？」

「わかったから……日本語で言い直すから……」

イラついてしまう。不愉快だ。朝からすぐに血圧が急上昇というのは、若くても危ない。

「……うん、早く言つてよ。眠いんだけど……」

「早く！出ていけ！」

「……？」

「『？』じゃあないっ！」

「イミガワカラナイヨ？」

なぜカタカナ？

「お前……ケンカ売ってんのか？」

さて、どうしてやろうか。1日3食抜きにしてやろうか

「……プスウ……」

こ、こいつ、布団に潜り込みやがった！

「無視したっ！寝やがったっ！」

「ムシ〜ムシ〜ムシ〜ムシ〜」

「ちよ、ちよっとおい！き、気色悪いから！やめろって……」

「……うん……」

理解を得られたようだ。それと言わなければならないことが……

「お前さあ、今顔がヤバいぞ……」

「え？……か、顔？か、鏡は？」

周りを見回し始めたので、近くにあった手鏡を渡す。

「ゲッ！」

やっと気づいたらしい。

ここで一応言っておくが、今まで僕が話していたのはおばさんであ

る。女の子ではないぞ！そこをご理解いただきたい。

「イヤッ！　なんで早く言わないの！」

色々ゴタゴタしていたから言う暇がなかった。早く言えば良かったかもしれない。なぜなら…

「うん！これで大丈夫だよ！私もピッチピチの〜」

「…幼女ね……」

一回後ろを見て少しぶつぶつ何かとなえたあと、ちゃんと昨日通りの顔に戻った。

「さて、これで君をイチコロにできるよ〜」

まさかあゝ。僕はこんな奴には欲情がわかないんだよ！この世の『ロリータ』なるものには興味がない！

「イチコロにするんだったら女の子じゃなくて、オンナになりなよ…」

「うつ…」

「でさあ〜」

彼女の顔のことが本題ではない。僕が問い詰めたいのが

「なんで僕のベッドで寝ているのかなあ？」

そう、忘れてはいけない！今も僕は冷たい床の上にいる。話している最中、彼女が上から僕を見下していたのだ。全くイライラして仕方なかった。

「だってさあ。まだこの家に来て1日目の寝る場所がリビングのソファで寝させるなんて、いったい君は何さまなんだ！？」

「お前の方が何さまだっつうの！　ここは僕の家で！　僕の部屋で！　僕のベッドなんだぞ！」

「それが？」

プチッ……キレたぞ！

「そこにいる化けたおばさんが僕の部屋にいる理由など、ないっ！」
一息ついて

「そしてお前とあと1週間過ごさなければならいなんてごめんだっ！」

「それは、きのうはなしたでしょ？」

ああわかつているとも。そうしなければならい理由は彼女にはあるが僕にはないのだよ！

「それに僕はおばさんとも、幼女とも同棲したくないんだよ！きれいな『お姉さん』かもしくは『美少女』かだ！」

「そ、そんなあゝ」

「わかったか！ 僕はお前が持ち込んだ厄介事を今すぐお前というしよに、捨てたくて仕方ないんだよ！」

「ね、ねえゝそんなことまで言わなくてもいいんじゃないかなあ？」

「僕にはこれほど言いたいことがあつたんだよ。昨日言わせなかつたお前が悪い！」

さてどう落としてやるうか？

「で、でもね？お父様の言うとおりじゃなきゃいけないんだよ？それだけは……わかつてくれる？」

こいつのお父様とやらの話をされた。だから、これに対してはこいつの言うとおりでないと僕の命が危うい。

「そんじゃあゝさあ……何か僕に利益でもあるの？」

「うんうん！ それはこれからの君次第だよ！」

……ハッ？

「頑張れば、君の未来は切り開くことができる！」

「……」

「君とならできるんだよ！ 君じゃなきゃむりだよ！」

こいつ、頬を赤らめながら叫んでいるところがかわいいんだけど、実際にはおばさんだから、少し残念な気持ちにされてしまう。

「まあ期待しといていいんだよな？」

「そうだよ。期待しといたほうが絶対いいよ！」

しかし、これからなんだよな。あと一週間耐えられるかわからない。「さて、僕らがやらなければならいこととかは、昨日言われたこ

とだけなのか？」

「うんそうだよ。それで、私にもちゃんと能力があるから大丈夫。なんとか君を助けるぐらいは出来ると思うよ」

「その自信はどこから？」

「元々、保証できるものだから自信があるんだよ！」

「いや、だからそれがどこからなのかって言ってるの」

「？　だって神様だから！」

そう、こいつは神様の修行者。

会ったときにそう言われた。堂々とね。

「……うん。わかったよ」

僕は彼女に笑顔を向けてあげる。内心、憐れんでいます。

「そうでしょ。私のことを信じていれば、君は死なない」

恐ろしいことを言う。だがこれは脅迫などではない。実際にあったから。

昨日は危なかった。危なかったというより、死にかけ、死んだ。だが、こいつの能力で助かったのかは知らない。

「あ、すっかり忘れてた」

変なこと思い出してしまった。昨日のことを回想していたら、今一番気にしてなくてはならないことを思い出した。

「今、何時？」

「エット…私二八人間デ言う時間トイウモノガ理解不能デシテ…」
絶対わかってるよ、こいつ。

「…早く」

「は、はい！」

2人で時計を探し始める。

いつもはベッドの近くに置いてあるのだが、昨日は時計をセットしなかったためどこにあるのかわからない。

「あっ！ あったよ」

「何時だっ！」

「午前八時前です」

「ノオオオオ！」

今日は学校なのだ。それも週のと真ん中。自分が起きた時間が把握していない僕がいけないのだが、いままでとは全く関係がなかったことに関わり始めてしまったため、何もかも狂い始めているのかもしれない。

「ど、どうしたの？」

「学校なんだよ！ 僕たち学生は勉強に励まなければならないんだよ！」

自分で言ってるのもなんだが、あまり授業には集中したことがない。

「ちよつと、や、ヤバ！」

「く？ ホント大丈夫？」

「制服！ 制服はどこだよ！」

おいおい。この時間にはもう学校に向かってなきゃ間に合わなくなる。昨日のようにはなりたくない！

「このことか？」

「おいっ！ なんでお前が踏んでんだよ！」

さて、どうするか？ 親が特殊だから弁当は毎日僕が作っている。なので、どこかしらで弁当を買わなくてはならない。すべて昨日と同じことをしてしまっている。

また、僕は大変な目に会ってしまうのかもしれない。

なんか、ゴタゴタ騒ぎで済みませんが、一応説明します。

僕のベッドの上にいるのは、幼女 に化けた僕より長く生きている神様の修行者らしい。そして、昨日から居候し始めた。僕はこんな日々を過ごさなければならぬ。

どうしてこうなったのかは、一回僕の主観の昨日というより、周りの人々を主観とした昨日から説明をしなくてはならなくなってしま
う。

それでは、僕とおばさんの出会いをなるべく短くお話ししよう。
たぶん短くはならないけど。なるべく短くします！なるべく…。

では昨日の回想を始めます！

第1話 第2章（前書き）

『電車内は心の中』もよろしく願います。

第1話 第2章

ある晴れた日のことです。

その日もいつも通りに、教室の窓側の1番奥の席（いわゆる特等席）で、とある授業でよく寝ている、僕の目の前でいつも通りに熱血先生が鼓膜を破ぶような勢いで、

「起きてるか！」

「は～～い。起きてますよ！」

もう完全に慣れてしまったこの会話。

「そうか！その調子でがんばれ！」

…毎回思うのだが、アホなのかな？僕は、黒板なんて見てないで、机で日向ぼっこか窓の方を見て…「あ、トンビだ」など眺めるかの2択。この授業を全く受けてないことをクラス中みんなには、知られている。教科書は開かないし、ノートは真っ白って言うより、この授業だけはノートを持ってこない。なぜかって言うと、この先生の最初の授業で、僕は驚いてしまった。

黒板に書かれた文字が読めない…。

まあまず、日本語じゃない。

英語でもない。

アラビア語に近いのだろうか、ほとんど記号が集まって、文が構成されている。

それをクラスみんなが全く気にしないで、ノートを必死にまとめている。

それに、50分授業のはずなのに1人あたり、ノートをめくる音が普通の授業だと、1～2ページしか使わないはずが、3回以上聞こえるのである。つまり、6ページ。そんなにページを使って何を書いているのか気になってしまう…。

内心では、もう授業についていけないなあと思った。というか、確定事項になってしまったが…

「いい加減にノートに黒板のをさあゝ写したらどうなの」

先生が僕の所から黒板まで戻って、また何かよくわからない文字列を書き生み出し始めた後に、隣の須原さんが話しかけてきた。

「前から言ってるじゃん。日本人なのに先生の文字が読めないんだよ。僕、日本人をやめてしまってるいいのかな？ それとも先生が日本人をやめた方がいいのかな？」

「私は、君がなんで読めないのかわかんないけどね」

「いや、なんで僕以外の方が先生の文字読めるのかわかんない」

「じゃあ、例えば黄色で書かれたあの文。読めるでしょ」

「x …」

「……。わざと読んでないよね」

「……」

「いかにも、アニメに出てきそうな言葉を使ったよね」

「これ以外に、表すことができないんだよ！」

「本当に読めないんだね。君のこと憐れんでいいかな？」

「そんなことで僕はめげない！」

「じゃあ、授業ちゃんと受ければいいじゃない」

もつともである。

「じゃあさ、なんて書かれてるかわかるの？」

「こう書かれてるんだよ」テストに重要だから覚えておけよ。では、書いてやろう。そう、おいしいプリン作り方だ！」

この授業、世界史だったはずなんだけどなあ…。一応、初めてプリンが広まり始めたか、触れておきたかったのかなあ。それにわざわざ喋っていることをさあ…そのまま書いているのかああああ！

「『材料（5個分）プリンの生地卵 3個（Mサイズ）…』」

キン コーン カーン コーン

須原さんの先生が書いた文字の翻訳中に授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「おっと、もうこんな時間か」

「まだまだ説明する気でいたらしい。」

「では、授業を終わりにする。今日の授業の復習として、1回でも親のために、私のおいしいプリンのレシピを使って、作ってみるといい」

「……はいっ！」「……」

「では、さらば！」

いつも通り、クラス委員長の合図で、「気をつけー・礼！」の代わりに、

「レディー・ゴー」

と叫び、ドアの近くに座る人が思い切りよくドアを開けて、先生が勢いよく走りぬけていく。凄まじい音が廊下を響いている。どどどおおおおおうううう

「さて、部活く部活く。夏の甲子園に向けて、レッツ・ゴー」

「野球部のマネージャーだっけ？」

話しながら彼女は、足踏みをして

「ばいばい」

「無視ね……」

走り去って行った。

それに、他の子も部活が楽しみなのか、ほとんどの人が、1分以内に教室からいなくなった。普通に体育系でない子たちまで走ってた。その中に、さっきの彼女も含まれる。最近文芸部もちゃんと体力作りからがんばるのかな？

さて僕も、学校にいる意味がなくなる。なぜなら、帰宅部なのだから。……あんまり自慢げに言うとか痛む。というか、帰宅部の目標が誰よりも早く自分の家にたどり着くかの競争なのに、幸先、スタートからもう出遅れた。もう、帰宅部としての威厳がない。まあ元々ないけどねえ……。

「どけどけどけ！」

と掃除係の人がタツクルしてきた。いつもながら、とにかく部活に早く行きたいそうで、人のことなんか全く考えてない。よくて3分待ってくれるかどうか、きわどいところ。カップ麺も待てないのか。こんな教室からとつと出た俺は、することがない。人生がこんなのでいいのか？と言われると、まあ別にいいかな〜というぐらいにグダグダな生活をしている。

こんな日常で僕は十分良かったのです。枯れてませんよ？ ですが僕はこれからの日常がこんなにも変わるなど、この時もまだ知らなかったのです。

第1話 第3章（前書き）

元々原稿を書いてあったので、1日でこれほど掲載できました。

『電車内は心の中』もよろしく願います。

第1話 第3章

僕の特技と言ってはなんですが、そこらのリア充（僕より生活に充実しているということです）とは違い、朝が強いいため、規則正しい生活（身体的に）を充実させているのです。ここは胸張って自慢しますよ！それで、朝飯も食べ、制服に着替え、いざ行こうとするのですが、たいてい…

「ねえ、お母さんのために、朝ごはん作ってえ〜」

だらしないお母さんが登場。髪がボツサボサの状態で、眠たげな顔している。

そして

「なんで、またパジャマ着てないんだよ！ 風邪ひくだろ！」

「前から言ってるじゃない。ちよつとパジャマって苦手なのよ〜」
別に家族だから気にしなくてもいいと僕自身が許せるなら、いいんだけど…。子供の僕から見ても、お母さんのスタイルがまぶしすぎるのである。

お母さんの名前は、穂積愛里子。仕事が女優で、40を超えても全く世間からの評判が落ちず上位におり、僕の友達でも、お母さんのファンがいるほどだ。

しかし、それは表の顔だけで、家に帰ってきたら、完全に僕よりおこちゃまになつて、家事全般、僕に全てまかせきりにする。もうちよつと自立してくれたらいいのに。

「もう行かなくちゃいけないから。というか、フレンチトーストぐらいは作つといたから」

「ねえ、もうちよつとお母様のために、おいしい心温まる手作り料理とかないの〜？」

「というか、僕の腕に絡みついてくるな！胸が当たってる！」

「うふふ。赤ちゃんの時は、お母さんの胸を鷺づかみにしてたくせに」

「とにかくはなれろ！」

「お母さんのために作ってくれるなら、放してもいいわよ。だから、おねがいしま〜す」

涙を浮かべた目で僕を上目づかいで見てる。どう見ても、芸能界の清楚な美人が全くの台無しになってしまっている。

「もう、わかったよ。ちゃんと作りなおすから…。早く放せ…」

「うんうん。お母さん、明ちゃんがこんな子に育ってくれて、ありがたや、ありがたや」

本当に手を焼く親である。

ほんの10分で、ちゃんとした料理が出来上がる。作ったのは、少し焦げたスクランブルエッグ、ウインナーが2本、それも、弁当用の小さい赤ウインナー。あと先ほど作ったフレンチトーストを焼き直し。作っている間、

「まだ、できないの〜?」

とか

「早くしてよう〜!」

とか

「がんばってえ〜」

とか、とにかくうるさかった。

そして、僕の体にまわりついてきたり、首締めてきたりして、フライパンを手放すしかない状況に追い込まれ、スクランブルエッグを焦がしてしまった。初歩的ところで、失敗するなんて、ホント、自分が情けない…。

「じゃあ、明ちゃんの愛のこもった手料理、いただきま〜す〜!」
ホントめんどくさい。そういえば、もうそろそろ学校に行かないと遅刻する時間になってきている。

「このスクランブルエッグの焦げ具合がちょうどいい」
なんか失敗したところが、高評価もらってるんですけど…。なにが

いいのだろうか？炊き込みご飯のおこげとかならわかるんだけど。

「満足したんならもう行くよ」

あ、そういえば…。

「ねえ？今日、確か映画の撮影だったよねえ？有名な俳優ばっか出るやつ。夜遅いよね？」

「何言ってるの？昨日話したばかりじゃない。明日よ。今日は丸１日暇なの。だから、なんか楽しんできちゃおうかな？」

ちよつと待て…。明日？昨日話した？何言ってるのか理解できない。だつて、

お母さんの予定聞いたのは、おとといのはず。

おととい、お母さんはドラマの撮影のために、夜遅く帰ってきて僕は母親思いのいい息子のため、温かい料理を作つてあげた。そして、昨日は丸１日休みだということで、ショッピングモールに出かけた話を聞いていた。

「そうだなあ…近くに新しくできたショッピングモールで明ちゃんのために、なにかいいもの買ってきてあげようかな？楽しみに待ってるね。あと、時夜さんのために、いいネクタイでも」

時夜さんというのは、僕の父さんで、えつと…いまどこで何しているのか、お母さんしか知らない。なぜか教えてくれない。相当やばいことやってるのかな？

もしかして、軍の特殊部隊所属していて、僕たちの平和は彼らによつて守られているとか……ないか。

「もう行かないといけないんじゃないの？」

時計を見ると、いつの間にか１０分たつてとつくに、遅刻してしまう時間になっている。

「そうだな…あのさ、もうそろそろあいつも起こしとかないと、学校送れちゃうぞ」

僕の家族は４人家族だ。ご紹介した両親、僕その他、中学生の妹が

いる。いつも僕に起こしてもらわないと起きないが、今日ぐらいは自分を大事にしたい。

「うん、わかったあゝ。わたしじゃ起きないかもねえゝ」

「とにかくお願いね！　じゃあ、行ってきます」

「いつてらっしやいゝ」

でも、さっきの話、僕の誤解だったのかな。まあそんなことはいいや。今は、僕が遅刻して担任からのしつこい長話を聞くのがいやなので、急いで家を出た。

……のはいいけど、ヤバイ…弁当作んの忘れてた。

第1話 第4章（前書き）

どんどん掲載していきます。

第1話 第4章

遅刻しているうえに、昼ごはんのためにコンビニに寄ることになってしまった。

別に学校の購買で買えばいいかもしれないけど、そんなところで買うことになったら、僕なんての華奢な体の僕には、死が待ってることになってしまふ。いやマジで…。

昼前の三時間目の終わりを告げるチャイムが鳴ると、購買前は戦場化する。

皆求めるは、この学校のOGであり、ミスグランプリで優勝をしたことある香夜美先輩が1人ずつに渡す『特製とにかく粒が大きいアンパン税込み価格315円』。

なぜそんなところで香夜美先輩が働いているかというと、前まで働いていたおばあちゃんのこと大好きだったらしく、よく手伝いをしていたらしい。

とっても評判も良かったらしいのだが今は、寝てないといけなくらい体が悪くなってしまったそうだ。で、おばあちゃんのために引き継いだらしい。

心温まるお話なのだが、実は、香夜美先輩はどんな時でも特製アンパンを誰よりも先に買ったために、周りの人を押しのけ、叩き潰していたそうだ…。

その時の彼女の2つ名を『破壊神』。全くもってそのままだな。友達の先輩たちの話では、いつも溢れんばかりの微笑みで、周りの人々を心地よくしてくれる人が、その時だけ妖怪のような恐ろしさを振りまくらしい…想像するだけで寒気がする。

それで今は香夜美先輩がいないので、けが人が前より少なくなつた。それでも、そのアンパン（まだ食べたことないけど）限定10個のために、命がけで戦いたくもなし、そこでの戦場に巻き込まれたくもない。だから、コンビニのおにぎり（梅干しとシーチキン）

を買わなくちゃいけない。まあ、通学路の途中にコンビ二があるし、前もって何を買うか決まっているし、そんなに遅れることはないかな。

コンビ二前の交差点にたどり着いた。片側2車線の大通り。両側で四車線。

ここにたどり着く前に赤信号に何回も引っ掛かるとはとんだ災難だった。

もうホームルームも始まってしまっている。気にしないゝ気にしないゝ。どうせ怒られる。なら、もっと遅く行ってもいいのではないかと考えた。もう走る気力すらない。もうそろそろ信号が青になるかなゝ？

「……長い。長すぎる!」

大通りだから、信号が変わるのに長いことは、わからなくもない。しかし、排気ガスを吐きながらトラックが走り去らないで静まっている。1台も通らない。なぜだ？

「もう我慢できない…。勝手に渡っちゃおう!」

と思った矢先、後ろから長い茶色を帯びた髪を垂らした十二歳くらい女の子が僕を抜いて、どんどん横断歩道を突き進む。

先を越された…。僕も渡ろう…。

そう思っただろうとしたら、猛スピードで1台も通っていなかったこちらの車線に車やトラックが一斉に走ってきた。どこかの信号で待たされていたのだろう、とてもじゃないがスピード違反しているんじゃないかと思う。

だが、反対車線の方を見ると1台のトラックがのろのろ、くねくねと女の子めがけて走ってきていた。

ヤバイ、居眠り運転だ!

彼女も気づいたらしく、反対車線の真ん中で車のほうを見てしまっている。

こういうときに冷静な判断をしなくては。

……無理だ。

ヤバイ、ヤバイ！

駄目だああああ！

状況を確認しよう。

たぶん今僕は、ウルトラマンの要領で、飛んでいると思う。
例の「トオッー」で、手を前に出して飛び立つ感じに。

完全に三球三振三アウトのようだ。

たぶん、もう僕はそのまま彼女の近くで無様に転ぶだろう。
彼女は動けない。

2人そろって死ぬことになるだろう。

彼女がこちらを見てきた。

泣いている。

恐怖で体が震えている。

動く気配もない。

もう無理だなあ……。

女の子に一応謝っとく。

1人じゃ死なせないぜ！

心の中でだが。

こんなかつこいい言葉、声に出せるわけがない。

あ……あ……

最後の最後まで僕は人のために、何か出来る男ではなかった。
人助けぐらいしかかったなあ……本音だよ。

このまま2人で天国に行こう。

悔いの残る人生だった。

特にまだ、何にもしてないからね。

お父さん、お母さん、ごめんよ。

……いや、まだだ…。

彼女はまだ救いようがある。

まだ、彼女の人生を終わらせるのは、かわいそうだ。

頭をフル回転させる。

せめて、せめて。

僕は体を必死に動かした。

空中で、必死にもがいた。

いわゆる平泳ぎのように。

もう少し、浮かんでいられそうだ。

今、僕は賢いと思った。

なぜなら、この状況でまだ彼女を救える方法を思いついたから。

僕は、とにかく彼女に向かって飛んだ。

飛んだ。

飛びまくった。

たぶん2メートルぐらい。

そして、彼女の体にタツクル！

ホントごめん。

痛いだろうけど、今は我慢が大事！

なんとか彼女を押し出した。

思いついたのはそんな簡単なこと。

しかし助けることは出来たと思う。

残るは僕だけ…。

そして、無様に、地面に落ちた…。

女の子がこちらを見てきた。

驚嘆した顔だ。

タツクルされても、痛そうな顔をせず、ただ驚いている。

せっかく助けてあげたのに、微笑みぐらい向けてくれたっていいじゃないか。

たぶん、最後に見る表情なんだから。

そして僕は彼女に向けて、微笑んだ。

僕が生きている間の最後の表情だ。

そして、死んだあとも笑っていられるように。

涙は出なかった。

出る理由がなかった。

時間にして、1秒ぐらいかな。

僕の体はあっさりとトラックのタイヤによって踏みつぶされた。

第1話 第5章（前書き）

同じ日にどんどんアップするの疲れたので、今日はここまでですw

第1話 第5章

ここは、天国である…わからないけど。

絶対そうでなければ、どれほど閻魔大王がちまちました奴なのかはつきり分かる。なぜなら、別に地獄に落とされるようなことはした覚えもないし、最後の最後で人助けをしたのだから天国にいる権利ぐらいはあると思う。

それとも、女の子も巻き添えになってしまったか？

それだったら、天国にいる権利もないか。

じゃあ僕は天国と地獄、どちらに行けばいいのかな…。

それにしても、気になる。ちゃんとあの女の子は生きているのか？もしかして…僕のことを助けるために戻ってきてしまったとか。そうなら、ありがたいなあ。僕を見捨てないでいてくれる人がいたことになる。

しかし、ここは幻想的なところである。というか人が思いつくようなところだったら、天国いる気がしないはずだ。

とにかく、周りを見ても流れる雲のようなのが、太陽の光のような淡いオレンジに近い赤色と白が混じって、漂っている。まるで僕を包み込むような感じに。

まあとにかく表現するのが難しい。なんともいえないのだ。

そういえば自分の体がない。ないというか、体がないだけで魂がむき出しになっているかのように、宙に火の粉のようなのが浮いていると考えてもらうとありがたいです。

さて、これから何をしたいのかわからない。動いてみるかと思つて、やろうとしたんだけど、はつきり言つとく。動いてるか分からない。

なぜかという、まず第一に体の感覚自体がないから。

第二に動いていたとしても、周りを流れる雲のようなものが動いていて自分が動いているか、全然わからない。

困った。ホントわからない。助けが必要だね。だれに？……ぐわあ

近くに僕みたいなものもないし、天使のようなのがいたっていいのかな？ もう神頼みだね。近くと言っても助けを求めるのと言えば、やっぱり神様ぐらいだね。しょうがない。

（神様……どうかお願いします。）

………やっぱり無理か、はあ……。

「ホント、ダメそうね。こいつ」

そんな言葉が聞こえた気がした。

あれ、何とか届いてしまった？ 聞こえたけど意味が理解できない。そこでなんで『ダメ』なんだ？

僕はこれからどうすればいいのかな？ 助けてもらえるかとそんなことをあれこれ考えていたんだが、

周りの景色が急に青と黒の境目のような色が広がった。

なんだ、なんだ？ 何の儀式だ？ 太陽の光は消え、雲の流れは速くなり、紫電が走る。

さっきまでの心地よい雰囲気から、冷めた悲しみのようなのが僕の心に押し寄せてきた。

怖い。

怖い。

マジで怖い。

神をおごらせる事でもしたのか？

お前なんてほんの少しで握り潰すことが出来るんだぜのような感じだ。

地獄に落とされたのか？

もうだめだ。

目というものはないけど、目を閉じた。たぶんそんな感じだと思っ
完全にシャットダウンした。

本当に周りから切り離されたような感じになった。

もう、この世界にもいられないと思った。

もうどこにでも飛ばされてしまえ。

第1話 第6章（前書き）

長すぎなので、編集し直しました。

どうもすみませんw

第1話 第6章

叩かれた…というより殴られた。

え…なんで？

僕の体はないはずだ。

見えなかったし、感覚自体がなかったはずなのに、誰かの手が僕の肩近くを叩いてきた。

ちよつと待てよ…。神様が何かなさった？ さっきまで完全シャツトダウンのはずだったのに。

まあ、どうせ神様だし、簡単に僕のことなんか、色々変えられちゃうんだろっね。

怖いけど、とにかく目を見開いた。全力でね。

殴られた…一応叩いたことにしよう。叩かれたということは人もしくは動物がそこにいることは間違いない。ということは相手は応答がほしいんだろっ。だから開けてみた。

なんだろっか、前がぼやけている。

幻想的なところである。

あれ？ あちらこちらに灰色の建物らしいものがそびえたっている。さっきよりモヤモヤしているところだなあ。

でも、自分の腕のようなが見える。

僕の予想だと、違う世界に飛ばされて今度は実体化できるということかな？ まあ、ないよりいいかあ。そして、よくまわりを見てみた。

なんだろっ。青いような緑色が光って見える。

そんな遠くではなさそうだ。正方形型で、青というより緑のほうが近い。

なんだろっ。ピッポ、ピッポのような音がする。

前の方から聞こえてくる。そのあと、音が変わり光も点滅し始めた。音は、ポ、ポ、ポ、ポの一定で、それに合わせ光も点滅している。

そして下の方を見た。

なんだろう。前に体全体にモザイクがかかった女の子のような人間型がいる。

…女の子？

身長が僕の胸あたりまでしかなく、こちらを見上げている。

なぜだか知らないけど周りがクリアになってきた。

だいぶ見えてきた。何か見たことある風景だ。ちよつと考え中…。

あ、生きていた時のコンビ二前の横断歩道だ。

そう、僕が死んだと思われる横断歩道の目の前に今いる。

いやあよくできている。なんというか懐かしさがあるねえ。うん？

そうか、この世界は死んだ人が第2の人生を送れるように作られた世界なんじゃないか！

これにはちよつと期待。なぜなら、第2の人生となれば、やり直しが効くんじゃないか？これまでのつまらない人生を捨てていざ！新世界へとこの感じ。

そんなことを考えてウハウハしていた。それであることに気づく。

……待てよ。女の子が目の前にいる。

よく見てみたら、

おいおい、その子もなんでそのまま同じ子なのか？

生きてた時と全く変わらない状況だよ…。

「どうしたの？ さっきまで地獄の閻魔様に会ってきてたかのように顔が青白だったのに、急にほつぺたダラ〜ンとし始めちゃって？」

僕の目の前にいる女の子が顔を覗き込んで来た。女の子の指摘が合っていれば、相当恥ずかしい顔だったに違いない。とにかく僕は恥ずかしさをこらえ無表情に努めた。

「さっきからずっと立ったままだけど、大丈夫？ それに表情豊か

なお兄さんだね。今はゆでダコみたいに真っ赤かなのに無表情なんて。プツ……」

笑われた。クツ……。

「私がそんなになつたら、恥ずかしさのあまり逃げ出すよ、だぶん？（笑）」

ニヤリとしてきた。なんと好戦的な少女。

大人を甘く見ちゃあゝいけない！

だから、僕は君の言葉にはのらない。大人げないからだ。

「おゝゝい、聞こえてますか？ 聞こえてるよね？ じゃあ、言うよ」

「なにを？」

「そんな目で私と目を合わせないで！ 死んだ魚のような目をして、小学生を見ないで！ まだ、ロリ好きの太った男に好奇心な目線で見られた方がいいね！」

「なっ！」

なんだなんだ、この少女は！ 生きていた時に助けた時は、おとなしそだったのにこっちの世界では、僕をけなすサイヤクな奴に変身してしまったのか？ 何という変わりっぷり。哀れである……。そしてイライラしてくる。

しかし僕は大人だ。のってはいけない

「お、ちよつと怒った？」

勘の鋭い女の子だ。

「ああ、少しな。すこしだけ」

「ちゃんと生きてるじゃん」

ちゃんと生きてるよお！

あ、でも、もう生きてないか……。もう死んだよな……。僕はそう思う。「大丈夫そうだね。何を考えていたのか知らないけど、相当必死にまぶた閉じてたし。どっかのおじさんの怒った顔に近い感じだったけど」

そんなにヤバイ顔してたのか、僕よ……。

「ほらほら、なんかまた変顔しないの」

今、どんな顔になっているんだろうか。気になって仕方がない。

「正直に言うけど、ホントおもしろいよ」

また笑われたよ…。

「何か大丈夫そうだし、そろそろ私、行かなくちゃ！ お兄さん、ちゃんと高校生らしく生きるんだよ〜」

年下に励まされた。そんなに僕、哀れ？

そんで彼女は赤信号で横断歩道を渡った。

うん？……………赤信号？

「ちよつと待てい！」

待て待て待て待て！

なんだよなんだよなんだよ！

「え、なに？」

少女がまた前と同じように、横断歩道の真ん中で立ち止まった。

なぜだなぜだなぜだなぜだ？

なんでそんなところで止まるんだよ！

今回は、速攻で走り出した。

怖いからだ。

怖すぎるんだ。

前と同じようなことが起きるのが怖いからだ。

事故が起きる前に何とかしようと思った。

少女は、こちらを見て不思議がっている。

そんなのはどうでもいい。とにかくそこから離れなくては…。

今、気持ちと体が、タイムラグのないぐらいに動いている。

さっきとは違う。

心身ともに、彼女を救いたいと思っているんだ。

車が来た。

前と同じだ、何もかも。

こちらの車線には猛スピードで駆けってくる。反対車線はくねくね走ってくるトラックが来る。

だから、僕は足元を注意しながら、彼女の手を握った。

本当に彼女は不思議がつて、こわばっている。

とにかく引つ張って、向かい側のコンビ二に走りこんだ。
ギリギリセーフ。

「ちよつと、お兄さん。なんなの？ 誘拐？」

彼女が困り果てた顔で、そう言ってきた。

まるで自分がこの後何が起きてしまつかもしれなかったということ
を、全く分かっていない。

その顔を見て、頭の中でプツーンと切れた。

「なんで赤信号で渡るんだよ！ 車が来ないからって渡るのかよ！
事故が起きたらどうすんだよ！ なあ。なああ……」

「ちよ、ちよつと。な、なんで泣いてんの？」

知らないうちに、まぶたに溜まりまくった涙が滝のように頬を伝
っていた。

おいおい、どうした、僕よ。女の子の前でこんなに泣かなくなつたっ
ていいじゃないか。

「…少し悲しいことを思い出して…」

とにかく夢中で、叫んでいたから、特に理由がない。

自分の心の叫びだったのかもしれない。

だから、理由としては当てはまっていそうな言葉を言った。

「………」

今気付いたが、僕は少女の胸に飛び込んで泣きまくっている…。超
恥ずかしい…。

「そう…えつと…悪かった。悪かったわよ」

「……何が？」

泣くのをこらえて、少女の顔を見てみた。

彼女の顔がほんのり赤い。そして、恥ずかしそうにこう言った。

「その…赤信号で渡って…」

ああ、そんなことか。

そんなことかだよ。

しかし、そんな言葉を期待してたのかな、僕。前の世界では聞けなかったなあ、その言葉。だから、心が落ち着いた。

「…わかってくれたんだったら、いいよ」

なんだか、むずがゆいこと言ってしまったなあ…

こちらから話しづらくなってしまうた。それは彼女も同じだったよ
うで気を利かしたのか、

「…ありがとう」

と言って走って行ってしまった。

「……」

ちよつと気持ちがおさまってから、僕は学校に向かった。

一応、この世界でも学校はあるだろう。

担任の説教の長話しがこちらではないかもしれない。ちよつと期待
あ、そういえば、あの少女の名前聞かなかったなあ。まあまたこの
辺で会えるんじゃないかと思う。

それでだが、学校の正門前で気づいたんだが、やはりこちらの世界
の僕のバックの中にある物だけがなかった。

なんでだよ…。作つといてくれたっていいじゃないか！ 弁当っ！
それに、コンビニに寄って昼食買うの忘れた…何してんだよ！

第1話 第7章（前書き）

続き
W

第1話 第7章

普通に下駄箱で上履きをはいて教室に向かう。
誰もいない。

それもそうだ。なぜならもう朝の会も終わり、1時間目が始まってしまっている。

しかし、急ぐそぶりを僕はしない。
走りたくない。

授業をサボりたいというのもあるが、この廊下の静けさが何と言っても「走るな」と訴えてきている気がしてならない。歩くだけで少し音が鳴るので忍び足になってしまう。
もうちょつと堂々と生きた方がいいのかな？

今日は、数学からである。はつきり言う。朝から数学をやると1日の自分の体力を半分以上使う。

これらの意見は誰もが共感してくれるんじゃないだろうか。

- 1 に、数学自体がめんどい。
- 2 に、授業が淡々としている。
- 3 に、先生が私語禁止という授業をしている。
- 4 に、先生がめんどくさそうな顔して、授業している。
- 5 に、みんな催眠術にかかる。

理由としてこの5つがある。

1つ目は、僕個人の意見だから気にしなくてよい。
2、3、4、は先生のせいと言っても過言ではない。授業は先生の一方通行、つまり、先生が指名して答えさせることがない。
そして、私語禁止に先生自体がめんどくさそうに授業をやっている。
もうこれは、知らない…。

そして、集団効果なのか5つ目として催眠術にかかり、寝てしまう。

しかし、出席日数が足りなくて退学にさせられるのはよくないので、行かなくてはならない。

僕のクラスは、昇降口の近くの階段を上がって、2階のすぐ近く。少し気合いをいれて、いざ参る！…のは良かったけど、中を見てみたら…なんで

「なんで、だれもいないんだあああああああ！」

教室間違えたか？ はたまた、授業間違えた？ それとも、こちらの世界では数学がないため違う授業をクラスみんなは受けているのかもしれない。なんという、ありがたみ。……ある訳ないじゃん、何バカなこと考えてんだよ、僕よ。

それでどうするか。なにをしようか。

一応、自分のクラスはあることを確認した。だって一年一組なのだから、なかったらどうすんだよ、この学校。

そんで、教室には入ってみた。

気づいたんだが、ちらほら、机の近くにバックが置いてある。あと、教科書やノート、ペンケースがある。ペンケースで誰か教室に忘れたのかな。

どこか歩いて行って探すのもいいけど、戻ってくるんじゃないかと思って窓側の奥の自分の席に座ってみた。

「今日は快晴のため、ぽかぽか日よりで日中はとても過ごしやすいでしょう」

というお天気おねえさんの話は合っていて、寝心地のいい快適な特等席となっていた。

「こんなにいい天気なんだし、寝てても罰はないよな」

では、おやすみと言いたかったんだが、ふと見てしまった。グランドのほうを…。

「なんで昨日やったマラソンを今日また、この時間にやってんだ？」

もう、頭がこんがらがってきた。

1時間目の授業の終わりを告げる鐘が鳴る前に1回教室から出た。なぜならこうして寝たまま待っていたことになる、完全にサボりが確定してしまう。そうならないためにみんなが教室に戻ってきた後、再び教室に入れば、

「おう！今来たのか？遅せえなあ。サボりか？」

「いや、ちがうって。ただの寝坊だよ」

という感じでうまくいけるはず。

そんなわけで、どこに隠れるとするか。

鞆を持っているから、あんまり目立たないところがいいのかもしれない。

最初トイレで待ってようかと迷ったが、たまに何人かがそこにたむろっていることがある。そんなところで待つのは全くごめんだ。

人通りの少ない廊下で待とうかと思ったが、そこまで移動するのに別の教室にいる何人かには絶対見られる。

なので、昇降口から入って来たかのように偽る。

この場合はさつきも話したと思うが、この教室はこの2階のどの教室よりも階段が近くにある。そのため誰にも教室から見られることがない。

何と運と頭の回りのいい男なんだ、僕は！

そんなこんなで、下駄箱の近くまでたどり着いた。

体操服を着た誰かが入ってきた直前に、下駄箱の前で上履きを履きかえれば、誰かしら今、僕が来たように見えるだろう。

さてと、準備、準備。

「やっぱあいつ、サボっただろ！」

「さあな。でも、俺たちのつらさを味わってほしいもんだぜ？」

「まあ、来たらしばいてやろうな。うふふふ……」

なんでもう来てんだよううう！

見てみるとうちのクラスの奴らがいた。

「おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい！」

もう運が悪いすぎだよ。どうしてたよ！

何人かのクラスメイトがもう下駄箱に集まっている。

そんなはずじゃあゝ。…もっと早く来ればよかった。

「もうちよっとお手柔らかにしたら？ 例えば何人かで集まって言葉攻めしたらどうかなあゝ？」

「お、それもそれでありか。オホホホ……」

「ぎゃーーーーーーー」

そんなのは嫌だあ！ もうなんだよ、みんなして！

「なんかさつきから廊下で誰か悲鳴っぽい声出してんだけど。誰だよ……」

声出てたのか？ 全く気付かなかった…。

「さてどうしてやろうか？」

「ウヒヒヒ……」

怖すぎだよ…。

こんなにクラスメイトが危ない輩だったとは知らなかった。もう会えないぜ、この人たちとは。

早くここから脱出しなくちゃ。

下駄箱近くの廊下で身を潜めていた僕は、早くここから立ち去りたくなってしまった。

もう、どうすればいいか全くわかんねえ…

…トントン…

「うん？ なんだあ？」

「ハア~~~~イ」

「…せ、先生？」

後ろにいたのは、僕の担任の高橋明日奈先生だった。

てか、この人笑ってる。笑ってるんだけど、目が笑ってないよ…。

「うん、担任の明日奈先生だよ。さあて、君はここで何をしてるのかなあ？」

笑顔がチャームで生徒からの信望があるこの担任が今は怖く見えてしまう。

モウダメダ。

見てられない。アハハハハハ…。

第1話 第8章

さてと、まあ担任に職員室まで連行されてこっぴどく叱られた。

家での事情に事故りそうになったことを細かく話してあげた。まさか本当に事故った方を言っちゃうと、なんかごたごた騒ぎになつてしまふ気がしたから、そのことについては何も話さなかった。

それに、なんかいい暇つぶしになった。

意外と叱られていても全く気にしなかった。

ただ、担任を見ていただけ。

みんなよりも多い時間を見てられると思えば、うん、それだけで満足。さっきの事故のことなんか忘れられる。

それで、教室にたどり着いた時にはもう、2時間目も終わってしまっていた。

完全にサボリ確定だ。

どんな顔して教室に入ればいいのか？

何人かには――ちゃん（担任ね。もうあだなが結構定着してる）に連れ去られてところを見られてしまつてる。

これから実行するとして例えばこんなのはどうかだろうか？

「おはよう！もう昼近くだねえ。みんな元気してるかい？」

「叩きのめすぞ！」

「おうとうとう！」

（クラス全員で）

……ダメだ。最初からこんな言葉言えるわけがない……。

では、こんなのはどうかだろうか？

「あ――朝からサイヤクだつ……」

「皆のもの！ かかれ！」

「おうとううう！」

（クラス全員で）

……どうやってもバッド・エンドの予感……。もうどうにでもなれだな！うんそうしよう、そうしよう……。そうするしかないだろ。

……ぼんぼん……

「うん？　なんだあ？」

「待ってたよ、隆ちゃん。キャハハハ」

「……お、お前……」

そこにいたのは、僕の幼馴染の悠美香だった。

あんまり僕と背の変わらない高身長で茶毛の混じったショートヘア。足は美曲線を描いてスラーとしており、胸は大きくも小さくもなく全体的につりあっている。顔もなかなかで母親の血をよく引いておりクラスないだけでなく、学校内でも注目を置かれている。しかし、皆をよく見下した態度で女王様気取りの十六年来の付き合いだ。それに小中学、高校でも違うクラスになったことがない。

ちなみに僕の身長は175センチ。体重は……。

「なに考えてんのかなあ？」

なぜか知らないけど、こいつのことについて悪いことを考えたり、言ったりするだけでバレル。

「さてどうすんかなあ？　おばさまから言われてんだよねえ、くちゃん」

「なにを？」

だいたいわかってしまう。

「万が一に何かしらやばいことがあった場合、対処はくちゃん、よろしくってね」

「……」

もう黙りこむしかない。

こいつが言ったことは絶対だから、何されても仕方ない。

これまでやられたことを思い出すだけで、震えが止まらなくなってしまう。

「さあ楽しいことが待ってるんだよ」

「はいはい」

もう連行されるがままだった。きょうあと何回連行されるんだろう…。

もう少しお手柔らかにしてくればよかったものをなんで僕は、こんなひどい目に合わなくてはいけないのか分からない。

僕をなんと思っているんだよ…。こんなクラスにいたら、心身ともにもたねえ。

3時間目が始まり、国語のおばさん先生が入ってきた時の表情と言ったら、もう笑い物だよ。

顔が凄いいくついていた。

どうしてかというと僕が原因。

幼馴染によって僕は初めて『イジメ』というものよりも怖いものを体験してしまった。

これまでイジメられて鍛えた心身に相当なダメージが…。

「あなた…なんでつるされてんの…？」

現状を言うと、黒板の上に長い棒が固定されているのと、僕の体には大量のひもというひもが巻きつかれている。

そして顔には張り紙がされている。ちょうど僕の目の部分に穴があけられている。つけられる前に見せつけられた。言いたくもない。

『我はダメ人間。この世のすべてのダメ人間を代表する男である！』

もうクラス全員が悪だよ。誰も助けない。というかみんな大爆笑。先生はというと、

「誰ですか、私に対してこんなイタズラして。もういい加減にしてください。早く処分してください。さあ始めますよ。試験も近いのでスピードアップして頑張ってくださいますよ！」

完全に物扱い。僕のことなんて目に入っていないらしい。いや、見ないようにしているらしい。

僕がつるされているのがちょうど教卓の上のため、先生が教卓をわざわざズラして、

「では、教科書85〜87ページを開いて…」

始めやがった。

先生まで敵とは！もう呪ってやる！こんな世界呪ってやる！

そのあとさすがに授業するのに邪魔な僕は、10分後には解放され、今ではちゃんとノートに写している。

この先生の字はこの学校の中でも一番きれいと評判で、あの熱血先生より断然よいのだが、たまに黒板に説明しやすいように棒人間でどんな場面なのか、絵が描かれることがある。

しかし、ヘタクソよりはいいのだが…その棒人間の表情を見ていると怖くなってきてしまう…。

なぜかその棒人間と目が合ってしまう。それはどこの席からもじつと見られているように感じる。これはどの人も同じ意見。

この絵が描かれた少しの間、誰もノートに写せないため、試験にその部分が出たら誰も答えられない。

「なんで皆さん、私が重要だと言ったところが解けないのでしょうか。もうちょっと私の説明をわかりやすい物にしてあげないといけないでしょうかねえ」

そんなことも発言している。

これ以上グレードアップしたら本当に誰も解けなくなってしまう。

ここで先生に助言した方がいいのだろうか？

いや、無理だ…。もっと絵に凝ってしまつて悪化することが目に見える。

はあ…この学校の先生は特殊なのかなあ…。

「ねえねえ。あその部分、ノート写してよ！ そうじゃないとみんなテストでいい点数とれないんだよ！」

隣の須原さんが話しかけてきた。

なぜかその話が聞こえたのか、近くの人全員がこちらを見てきた。どの人の目も希望のまなざしという感じだ。

ちよつと、ちよつと！ 僕の方から依頼したい気分なんだけど…。

「そこ！」

「…先生、僕ですか？」

「そうあなたよ、～さん。早くノートに写さないと消しますよ」早く消してくださいよ。お願いしますから。その絵を消してくればみんなだってノートに書けるんだよ。

あ、そうかそうか…。

「先生描き終わってますんで、その絵を消してくださいっていいですよ。」

みんながこちらを拝むような顔で見えてきた。なんかいやな気がした。「そうなのですか…。私の描いた絵がちよつともったいないですが… 皆さんも消していいでしょうか？」

「『はいっ！』」

「では、消し～ます。うう…」

ぎゃああああー

あの人、絶対わざとだあー。なんで絵じゃなくて文だけ消すんだよ！ みんなも

「えええええー」

さてと、どうするか…。

今度こそみんながこつちを見てきて、

「神様よろしくお願いします」

だつてさあ…。

授業終わった後に絶対バレる。代わりに変な文でも書いておこうかな…。お、そうすればさっきの仕返しができるかな？

キンコーンカーンコーン

だつてさあ……。この時間の終わりを告げるチャイムがなった。

ガアーーン。

「もうこんな時間ですか。では今日はここまで。次回はえっと……どうしましょうか？」

今度の授業で何をするか先生が考え始めた。今のうちに、やっちゃおう！

「ここの部分は結構難しいところなので、ちょっと復習してから進めましょうかな、次回の授業」

なんでそうなる！偽ったことバレちゃう！どうしよう……。

「では、終わりにします」

「『ありがとうございます』」

もう無理だあ。

あいさつが終わった瞬間にこちらにみんなして走りこんできた。

怖っ！もういいや。さあ、どうにでもなれたよ、たぶん……いや……ダメだ、絶対見せない。見せてたまるか！

皆から気づかれないように僕は机の中にしまう。

「ではでは、やってしましましょうか、ノート写し」

幼馴染が僕の顔を見てそう言った。絶対バレている。顔がニヤニヤしてるし……。もうダメだ。こいつの目と向き合えない。汗がダラリ……。

「ウフフフ……。さあ見せなさい。見せなさいと何されるかわかってるよねえ？」

「……………」

ダメだ。隠しきれないし、隠し通せない。ここまでなのか……。しょうがないのか？ここで捕まって連行されてしまうのか？

「ほら早くしなよ。ねえ？」

みんな顔が笑顔から真顔になった。後ろの方を見るとゾンビ化した奴らまで見える。

なんなんだよ…絶対危ない。危なすぎる。どう逃げ切ればいいのか…。逃げ切れるかわからないが、例えば…

「ちょっとトイレに…」

「まだ大丈夫だよねえ？」

「もうギリギリなんだけど…」

「大丈夫だよねえ？」

「……はい…」

絶対に無理だね。こんな見え透いた嘘なんて絶対バレるね…。もつと頭を使えよ、僕よ。ほらほらもう出そうじゃないか、もうそろそろ。そろそろ…

バサアッ

「……？」

「何を考えてたか知りませんが、見せてもらいますよ」

…ちよつと待て。僕はちゃんと机の中にしまつて、体で完全ブロックしていたはずだ。いったいどこから？

「昔から、考えているときは周りが全く見えなくなるんですよえ、あなたは。だから、そんな小細工しないで、素直に出せばいいものを」

そんなバカな。

「さあみなさん、ノートの準備できてますか？」

「『はい！』」

もうこうなつたら、逃げるのみ！

「ねえねえ、なんて書いてあるのかわからないから、ちよつと訳してよ」

僕の後ろにいる人たちが肩を掴んで、無理やり座りなおせた。そして幼馴染が机にノートを叩きつけた、例の何も書かれてないページ

を開いて。

「えっと、ここにはですねえ…」

「ほらほら」

ああ…もう終わった。この後起きることがもう予測できる。そんなこと考えたくないけど、どうしても。はあ…。

第1話 第9章（前書き）

続き

第1話 第9章

が終わった後は普通なら昼食&昼休みだったんだけど、みんな僕を今度はマジのリンチにされて体が動かなくて、ほとんどの時間を教室の後ろでうずくまっていた。

ちなみに誰も助ける奴などいない。

みんなが僕から去った後幼馴染から、

「昔から蹴られたり、踏まれてるときに目が完全にどっかいてい
るような目をするけど、やめた方がいいよ。みんな引いていたよ……」
そんな目になってるはずはない……とは言えない。やっぱそうなって
いたらしい。

小学生3年生ぐらいにそれで笑い物になったことがあるから。

なんとかして、そうならないように頑張って対策した。

そのおかげで？ なんとか面白がられることもなくなり、暴力でや
れることはなくなってめでたし、めでたしだったんだけど。

中学生までは言葉責めだった。

しかしそれもすぐに気にしなくなっていた。ある意味心身ともにタ
フになった。

だからヘツチャラ的な感じだったんだけど、まさか、両方とも今日
1日で瓦解されるとは思ってもみなかった。

なんてこった……。

そして今日は、食べるものもなくてそのまま授業に突入してしまっ
た。

この後もまだ3時間分授業が残っている。

腹が鳴って仕方ない。なんとかして腹の音を止めたいんだけど、腹
に力を入れるしか方法が見つからなくて授業なんて集中出来なかつ
た。

「凄い音だよ。どうしちゃったの？ なんか今日おかしすぎだよ」
隣の……さんからもそう言われるし、ホントどうかしてるよ、僕。

「オ、ホンツ。今日の授業はうるさい音によって集中出来ない人もいたと思うが、復習だけはちゃんとしとけよ！」

先生？ 僕のせいですか？

いや、みんな気にしてない感じだったけど？先生だけがそう思っているんじゃないの？

「いやあみんな気になってたと思うよ。でもねえ、ちょっとかわいそうな気がしたからみんな気にしないように努力していたと思う」
こ、今度はみんなして放置プレイか？

「ちよつとはみんなね、さっきのことはさすがにすまなかったって

」

横に來た幼馴染がそう言ってきた。

これには感動したよ。ちゃんとみんなは良心を捨ててなかったということだ。

「『まさか、ああまでこんな顔をしてしまつとは』だって。それは私も同感だなあ」

…… 前言撤回。ただ僕が怖い存在になってしまったただけか。

「ほら、もう次の授業始まるから、どうにかしてとめなさい、その音」

「いや、たぶん無理だと思っただけど」

「ならこうするの！」

「えっ……」

「こうするんだよっ！」

「グハッッ」

こ、こいつ！腹に…腹に蹴りをいれやがった。

「これで、大丈夫になると思うよ。ありがたく思いなさい」

「いや、なんかさつきに増して腹が痛くなってきたような気が…」
「うんうん、気にしないゝ気にしない」

と言ってさっさと自分の机に座ってしまった。

しかし、最初痛かったのだが割にはすぐ痛さも引いたし腹の音もとまった。

なんてこった。

これであいつに頭を下げなくちゃいけなくなった。

あ、なんでかというところから、あいつが僕になんか役に立った場合礼を言わなくては、このあと暴力かなにかをされるから。

まあとまった腹の音のおかげで、授業に集中できた。

そういえば、授業を今日ちゃんと受けてなかったから、気付かなかったけど…。

この授業さあ…昨日も受けてるんだよねえ。それも全く同じ。

6時間目。

例の熱血先生の授業だ。

全然さつきまで気にしてなかったけど、一応別次元にいるんだったかな？ いまいち確信が持てないから頭に『？』が浮かんできてしまったけど。

そんなに、今までいたところと変わりがなさすぎる。風景はそのままだし、人の意外な性格はさておき…幼馴染も変わった気がしない。まあ、この先生の授業を聞いていても意味がないので、今日1日の振り返りをノートにまとめてみた。

1、昨日、特にすることなかったため、風呂に入り、十二時前には、寝てしまった。

その時の心情として…また、太った…。(風呂場の鏡で自分を見た時)

2、朝は7時前には起きていた。朝食はいつも通り食べた。ちなみにカレーだ。お母さんにカレーを出してもよかったけど、もうちょっと寝かしといた方がいい気がしたから、出さないことにした。ちやうど今日の夜にはいい具合になるかな。

3、 そのあと、洗面所で髪の毛と格闘？頭のとっぺんのアホ毛が寝なくて、十分間の格闘をしてしまった。アホ毛をなめたらあかんぞ。

4、 玄関の前でお母さんに抱きつかれる。はあ……。原因はここからか？ここから僕の人生が狂ったか？このままちゃんと家から出たら普通の生活ができたかも。

5、 ちゃんと親のために料理を作った。スクランブルエッグにソーセージ、フレンチトースト。あの焦がしてしまったスクランブルエッグが忌まわしい。そして珍しく妹を起こさないで出てきた。いつもは大変で仕方ないので今日は幸運だったかもしれない。

6、 徒歩で学校に向かう。弁当を忘れたため、わざわざ大通りを通るはめに。ここでも僕の人生の歯車が狂いだした原因かな？いや、絶対お母さんだ！お母さんのせいだ…。

7、 事故る。これにたいしては割愛するよ。

8、 変な世界で過ごす。どのくらい過ごしたかはわからない。たぶん天国か地獄のどっちかだと思う。これも割愛。だってこれはホントに言葉が思いつかない。

9、 そのあと、たぶん第2の人生？なのかな。事故が起きる前の現場に転生されたと思う。というか、そこで今度は事故りそうになる。

10、 もうちょっと、僕はそこで何をしに来たか考えておけば、腹が怒ることもなかっただろう。何という失態！

11、 学校の正門を通って下駄箱にたどり着く。その時は自分のクラスの人たちはちょうど、裏門から出て外を走り始めたらしい。

12、 廊下を走らず、忍び足で教室に向かった。

13、 誰もいないので、自分の机で寝てしまう。

14、 なぜみんながいないのか、理解する

15、 みんなからわざと遅刻したように見えてしまう気がしたので、対策として下駄箱で偽るつもりが失敗する。すでに下駄箱に何人か生徒がいて、知らないうちに僕の後ろには明日奈ちゃんが背後

霊のようにいたし…。あの時の心臓と言ったら結構ヤバかった。

16、職員室に連行される。

17、叱られる。全然気にしなかった。

18、そう言えばこれを書いているときに気付いたからここに書き留める。僕は決してマゾではない！

19、そういえば、明日奈ちゃんの机に『最近はやりの先生の生徒の接し方』という雑誌が置いてあった。お疲れさんです、明日奈ちゃん。

20、これまでの授業での僕についてのことは触れたくないのだから…割愛します。

まあこんなもんだろうか。

全く普段通りでないのに、ここにいることが全然気になっていない。そして、なんかこの異常なことが『家に帰るまでがくくです』的な感じでありそうで怖い。どうにかして回避したい。

さてどうするかな？ 頑張るしか方法がないなんてありえんぞ！ある訳がないんだ！ 考えろよ、僕よ。まだなんかあるはずだ。

「お？ 今日ちゃんと起きてるじゃないか！」
やっぱり来た。

どうしても僕のことを気になるらしい。もっと授業に取り組んでもらって結構なのに。

「その調子で頑張れよ！」

最近思っただが、最後は『この調子で頑張れ』らしい…。この繰り返しなら、やっぱり僕のことを気にしないかと思うのだが。

「いつもはノート写さないのに、珍しくやってる…。ホント今日どうかしちゃったの？」

いい意味で隣のくくさんから間違われた。

まあ…いいかな？

「珍しいというか、今日色々ありすぎて寝れないんだよねえ…」
「窓の方も見ないし」

「そんな気分じゃないんだ…」

「ホントどうかしちゃったんだね…」

なんか逆に心配し始められてしまった。

「先生！ 穂積君が調子悪そうです」

お、おいおい！ なんだよ。

「うん？ そうなのか？ スマン！ 先生気付かなかったぞ！ そうならさつき言ってくれば良かったものを。先生が保健室まで連れて行ってやるぞ！」

「い、いやいいですって…」

「遠慮するなつて。ほら早く！」

デカイ背中を持つ先生が僕の体を担ごうとする。
ヤ、ヤバイ…連行される！

「先生！ 私が付き添います。だから先生は授業を続けてください」
救世主が現れてくれた。いったい誰なんだろう？

「そうか、悠美香が行ってくれるのか！ それは助かる！」

まさかのまた幼馴染か…。まあ助かるのは事実なのだが、礼を言う回数が増えてしまうのもなんかイヤだな…。

「ほら、早く行ってやれ！」

「はい。ほら、行くよ。ウフフ…」

さて何されるかわかったものじゃない。頑張つて逃げるしか…。

「逃がさないよ」

「え？ って、あれえっ！ なんで手錠されてんのっ？」

「だから、逃がさないって行つたじゃない」

逃げれない。素直についていくしかないらしい。

「はいはい。お一人様お連れします」

「付いていきますよっ！」

手錠に付いた鎖でどんどん引つ張られる。無理やり引つ張らなくなつて僕はちゃんと着いていくのに…。

「ちよつと2人きりになりたかったから、わざわざこうしたんだよ」
そんなことを廊下で話された。何をする気なんだこいつは？

「ねえ、なんだかいつもと違うような気がしてならないんだけど、何かあったんでしょ？　言ってみてよ」

そこを突いてくるのか。

言えるわけじゃないじゃんか…。

事故った事とか話せるわけじゃないじゃんか。

言ったら病院送りにされそうだ。

さっきから僕のことをおかしいばっか言ってるから。

「やっぱなんかあったんでしょ？　そんな顔してるもん！」

長い付き合いだから顔を見ただけやっぱわかってしまうものなのか。でもなあ…。なんでか僕の方は、こいつの内側が全く分からない。

いつもそうだが、僕と二人きりになると女王様気取りをやめて話しくなる。

「なんもないから。それに体にも異常ないから、普通に教室に戻った方がいいんじゃないか？」

「そんなことを言ってもねえ」。さすがに早く戻るとなんか言われるでしょ？」

うつ…。あの熱血先生だから絶対に追及してくるだろう。

「それもそうか…。」

「だからさあ」。保健室に行って暇つぶしでもしよう？」

それもありかな？

第1話 第10章（前書き）

ここで、第1話はおわりです。

第1話 第10章

「えっと…先生いますか？」

保健室にて…無音……。

「先生……。……いないようだね。じゃあ先生が来るまで、ベッドで寝ておく？」

お、おい、誘っているのか？

一応、僕は…男子なんですけど。

「い、いや、いいよ。寝る気もないし……」

「えゝえ。そう？ 昔は2人で寝たじゃん！」

それは昔のことだろうが！

今はさすがに……。

「最近寒いから、2人で暖まったっていいじゃない？」

「そ、そんな寒くないだろ！ きよ、今日なんてぽかぽか日よりなんだぞ！ そ、それに…寒くは…ないから」

思いつくだけ理由を幼馴染に吐いてやる。

絶対何かある！ ない方がおかしい！ 僕をベッドに引きずり込んでおもちやにするだけだろうが！

昔からこいつは寝像が悪すぎて、知らないうちに僕の頭にはこいつの尻が乗っかっていたり、幼い時は酷いことばかりだった。

「そんじゃあゝ私だけでくつろいでいようかな？」

なんでこいつだけ気にしないんだよ！ 僕は今、心臓がヤバいんだぞ。ドキドキなんだぞ！

平静そうに近くのカートンを閉めて、ベッドに乗っかっている音がした。「ハッキリ言っ、あの先生の授業詰まんないんだよねゝ。そう思わない？」

もう寝そべったのかな？

僕はと言うと、どこにいればいいか気にしていた。

隣のベッドに座っていいのか、それとも近くにある椅子を持ってきた

て座ろうか。」

そんなときにささやくような声で話しかけてきた。
「またも心臓がビククリ。汗も少々。」

「ま、まあねえ」

静かな空間で声をかけられると、こっちの声が震えてしまう。

「さてと…」

一息をついた。

な、なんだ？

「何が原因なのかな？」

ま、またかつ！

「と、特にないんだけど…」

「早く吐いちゃいなさいよ！　ねえ？」

「し、しつこいぞ」

こんなに迫ってくるなよ！　何されても言わない覚悟はできてるんだ…一応だけど。

「気にするなつて。別に気になることなんてなんにもないんだからさ」

「おばさまにも言っちゃうけど？　今すぐね？」

それはちよつとヤバいんだつて。

だつて小学生の時もこんな感じで幼馴染がお母さんに連絡したら走りこんで来たのだから。あのときの顔が女優として危なかった。

それ以来僕はなるべく親には連絡してもらわないように、先生たちに頼んだ。しかし幼馴染には通用しなかった。

「べ、別に車が突っ込んで来たとかないから」

「おつとおゝ？　そんなことが有りで。へえゝ」

ちよつと変な風に勘違いされた？

「事故りそうになつて、避けた先には電柱が！」

「そんなことじゃなくて…」

「どどんズレていく。」

「その電柱にぶつかつて、頭のねじが1本どつか抜け落ちたんだな

？」

「そんなことある訳ないじゃんか！」

「うん、そうだよ」

「はい？」

「そんな見え透いた嘘なんて、私に通用するとも思っただのか！」

「いや、あなたが引つ掛かったんでしょ？」

カーテンで見えないが、こちらに向けてビシッと手を向けてるような気がする。

「本当のことを言いなさい！」

「さつきからないって言ってるじゃないか」

「さあゝさあ！」

う、ウザい。ど、どうする…。面倒だからバラしてしまおうか、僕よ…。

……カチャ

「あなたたち！そこで何をしてるの？」

生徒が使った廊下からの扉でなく、別の部屋から繋がっている扉から保健室の女性の先生が帰って来た。万事休すか？

「すぐ近くにいますから、声をかけてくれればいいものを。なんか用があるんでしょ？」

あ、ここに来た理由が暇つぶしだったのはいいが、ちゃんとした理由を考えるのを忘れてしまっていた。

「え、えっと…実はですね」

「あ、そういうことねえゝうむうむ」

「はい？」

「大体把握したから。うふふ。先生がこんなところにいたら邪魔ですよね。さあどうぞごくごくつりくつりでください」

おいっ！ 先生！ あんた変な勘違いしてんじゃないやねえ！ そうやっ

て勘違いをしたんなら…

「不純性行為です！ 早く出て行きなさい。まだ授業中なんだから！」

ぐらいは注意しろよ！一番変な勘違いされて困るのはこっちなのだから。

「それでは」

来た扉から少し顔を出してそんなことを言いやがった。

「ちょ、先生…！」

ダメだ。でも、あの感じなら他の先生たちには報告はしないだろう。それはそれでありがたいのだが、あの先生にはもうそう思われてしまった。

「…まあ、もうそろそろ戻ろっか？」

「お、おう」

ちよつと気マズイ。あんなことを勘違いされては幼馴染もそれなりに気マズイらしい。

「はあ…。何にもしないなんて」

「え？ な、なにかな？」

「ううん。なんもないよ。なんも！」

ちよつと頭の中で整理していて、聞きとれなかった。なんで怒ってるの？ なんか悪い事でもしたか？ ちよつと横顔がプンス力的な顔をしている。

僕はと言えば、なんかもう少しイベントがあっても良かったのかもしれない。

い、いや何にも期待なんてしてないぞ！

「もうそろそろ、授業終わっちゃうね」

気マズイ空気を打ち破ってくれたのが隣にいる幼馴染だった。

「えっ、もうそんな時間か？」

一応、相槌をうつておく。

正直に言つと、話しかけてくれてありがたい。

せっかく話しかけてくれたから、このまま話しておこう。

「うん。もうそんな時間…」

「……」

あれれ？　なんか話が止まってしまった。これって僕のせい？

「……」

「……」

こんな気マズイ空気はつらい。

廊下を歩いている間、目は彼女の方を向けず、さまよつてしまう。

口からは何か話そうとして、「あゝ」や「えゝ」などの片言しか出てこない。

全くダメだな、僕よ！

「さっきのことだけど…」

な、なんだ？　さっきつて、ま、まさか…先生が勘違いしたやつか？　そ、そんなことを追及してくるなんて。

「もう、何にも言わないから」

「えっ？」

「別にさあゝ大丈夫だから」

「お、おう」

「そんなに気にしなくてもいいから」

「そ、そんなに？」

はあ？　こいつ、先生の勘違いをなんも気にしないで受け流せだど！　ま、まあ元々こいつとは友達として、幼馴染としてそれ以上にはなるつもりはないのだから……。別にいいのかあ…。なんか男として見られてないのかもしれない…。

「どんなにゝゝちゃんがね、どんな時でも、どんな場合でも、どんな状況でも、私は隆ちゃんの味方だよ！」

うつ、なんか励まされた…。

「あ、ありがとう…。そこまで僕に気を使ってくれて…」

礼の言葉を言つた瞬間、自分の内側でなにかストンと落ちた気がし

た。

「なんかそう言われると恥ずかしいなあ……」
頬赤らめて。

「だ、だからさあイジメられたら、私にいいなよ！ 今日みたいに
なっちゃうんだったらさあ……」

「な、なに？」

はあ？

「聞いてなかったの？ もう1回言うよ！ だからさあ、別にね、
どんなに隆ちゃんが頭おかしくなったり、イジメられたりして泣い
てるときでも私はね、味方だよって言ったの！」

「？……えっ？」

「ど、どうしちゃったの？」

「い、いや別にね。なんでもないよ」

今度は僕の方が勘違いか……。なんで勘違いするようなと言っただ
ろうか。ま、全く！心臓に悪すぎだぜエ！

そんなことはさておき、僕はこれから起きることの方に注意してお
かなくてはいけなかった。というか注意しといてどうにかなるもの
かと言うと、それは否である。これには誰にも反論させるつもりは
ないぞ！

第2話 第1話（前書き）

第2話目

第2話 第1話

保健室にいたところ。

学校正門前。2人の若い男女がいた。学生っぽい。

まだ、授業が終わっていないので正門前はこの2人だけである。この2人、男の方が背が高いためなのか、女の方が女の子に見えてしまう。実際はやはり女の子である…。

「やっぱ俺と相性悪いかなあ？ 実際年齢じゃ俺の方が年下なのに、お前の方が若いというか幼い分類に入るからな」。出るところが出てないから、かわいそうに…」

男の方は金に染まった髪の毛が様になっており、後ろで長い髪を結っている。服装は地面に付きそうなくらいに長いコートを羽織っており、実際の身長以上に背が高く見える。

女の方は、赤を基調とし桃色や橙色の線が入った着物を着ており、頭には白いニット帽を被っている。和と洋が融合し案外、似合っている

「見た目だけです。別に出ておかなくてはならないところが出てなくても、私はお淑やかな女性として押し通せることができるのですよ！」

（冷静に対処しなくては！ ここで涙が出たら…）

「まあ俺にとっちゃなあ、そんなことは気にしないぜ。どこのどいつかがお前に対してその部分のこと言ったら、俺にいち早く言うんだぞ！」

「べ、別に大丈夫だよ。き、気にしてないからね…」

めちゃくちゃ気にしているんだけど、言えないよ」

「俺はお前のそんなところが好きなんだから、それ以上は大きくはなるんじゃないぞ！ 大きくなるなあ、大きくなるなあ」

「な、なんなんですか？ そんなこと言わないでください！ 私は大きくなりたいんです！」

（あああああ！ 言っちゃいました！ 何してんですか、私！）
「お、大きくならないとあなたは私をいつまでも絶対！ 子供扱いし続けるですから！」

「だ、か、ら！ 俺はお前が好きだからそのままがいいんだって！」
「イヤです！」

訴えるために彼の体に飛び込む。

（ここは押し込まなくてはい！ 引いたら負けです！）

この2人の服装から異様だが、このじゃれあいが増幅している。

「お前なあゝ。フツ、わかったよ。出るところは出た方がいいもんなあ！」

「……えっと…そう言われてもちよつと恥ずかしいような気がしますね」

彼女の顔が赤く色づく。

男は依然として笑顔のままである。

いい雰囲気であることから一応言つとくが2人はカップルである。

こんなに熱々であればわからない者はいないだろう。

「さて、そろそろお仕事をやりましょうかねえ？ ここにいるんだろ？ 例の奴」

「今はやりませんよ。こんな人の多くいる前で出来ることじゃありませんから」

2人の雰囲気以上までに低くなる。

「しかし、静かなところだなあ。何にもないんじゃないか？ こんな学校に重要人物がいるとは思えないんだが…」

「だいぶ近づきましたよ。朝からそんな気配が漂っていたんです。だいぶあなたの家から遠いのに感じる事が出来たのですからやはり、近づいてくるにしたがつてわかりやすくなっていますねえ」

「そうなのかあ？ まあ、『お前を頼って正解だった』という風になりたいたいよな、やっぱなあ！」

「そうですね。そう祈ってくれてありがたいですね。元気が出ると

「いつもですよ」

「おっ？ そう言ってくれるのか！ やっぱお前が必要だぜ、俺にとっちゃ〜なあ！」

「私もあなたが必要ですよ。うふふ、こんな良い日々が送れるといいですけどね」

訂正…。何にも変わらない。全然引き締まることのない2人である。もうちよつとイチヤつくのを抑えた方がいいのではないか？（天からのささやき）

ガッシャ〜ン！…ドタツ…。

「お、おいっ！ な、なんだ？ なんか始まってんじゃねえかあ？」

「い、いえっ！ そ、そんなことはあるはずが……」

（ちよ、ちよつと、こ、怖いですう）

彼の方が怒ったように彼女に向けて言っただけ、泣き目になってしまふ。

「どっちだあ！ 早くしねえとヤバいんじゃないか？ なあ？」

「だ、大丈夫です。い、今は…違います」

「本当だろうなあ？」

「は、はいっ！ 確信が持てました！」

「おっ？ その確信とやらの理由を言ってみな？ 俺が納得できなかったら、お前に『アレ』をやるからな？」

彼女の肩を掴んで上から睨む。

（そ、そんなに迫られたら、わ、わたし、どうかしちゃうよ）

その目は他の人から見たらまるで鬼でも追い込むような鋭い目をしている。

しかし彼女はそれに負けないぐらいの涙目で見つめ返す。……あれ？ どっちの方が強いのだろうか…。

「ま、まずはですね。今のはただの窓が割れた音です。私たちのとは無関係です。」

「そうなのか？」

「は、はい。そして、私が感じられている『もの』はまだ1種類だけです。もっとも、そんな争いが日中から始まっていけば、けっこう人目について私たちの方が危なくなってしまう」

「そんなもんかあ」。じゃあさあ、この学校はけっこうヤバいのかあ？」

「い、いや、そ、それはただの偏見だと思うのですが……」

「よし！ 納得できた！ だからな、さっきはすまなかったなあ。怒鳴ってしまったてよあ……」

（私は彼のこんな顔が見たくないんです！）

「別にいいんです」

やはり彼にも彼女に対しての気持がある。彼女を傷づかせてしまった、そう思ってくれることが彼女には嬉しいのだ。だから彼女は嬉しそうな顔をして

「最後にそう言ってくれるのが私は嬉しいのです！」

「……アハハハ」

（はい！ この顔がいいんです）

「お前のその言葉、その顔を見てるところこっちも恥ずかしいだろうが！」

「た、たまにはそういう気持ちにもなってください。いつものように私の方が恥ずかしい思いはしたくないですから」

「そうなるか、じゃあこうだぞ」

急に彼女の頭に手が伸びて、かぶっているものを取ってしまう。

（そ、そこはあ！）

「ひゃあ、そ、そんな、そこは……ダ、ダメでしゅ……」

「うんうん。やっぱりかわいいなあ。お前はさあ！」

「だ、だから……ちょ、ちよっとおひね、るのや、やめてよあ」

「お前だけの特別な部分なんだから、大事に。大事に扱わなくちゃあ！」

「そ、それは、そう……だけど……撫でてくれる、だけで……十分だから

第2話 第2章（前書き）

頑張ってくださいw

第2話 第2章

そんな頃、僕はと言うと窓から投げ飛ばされていた。

…もう死にそうになることが溢れかえってしまつてとてもじゃないがやっぱ、僕はそのまんま死んだ方が良かったんだろうか？

さて、ここまでの経緯を説明しようではないか！ もう、そんなことを吐いてないと耐えられない！何もかも解き放てえ！ ……お、ホンツ…。で、では、説明いたします。

保健室から出た僕たちは普通に会話しながら歩いていた。

変な勘違いのせいで僕のメンタルが少し崩れかかっていたときに、彼女は発言通り僕のことを励ましてくれた。勘違いしなければ幼馴染の言葉はとも僕の内側に響いてきて心を泣かせてくれたのに。

本当はこいつ、いい奴なのだ。これまでも何度も助けてくれたことがあった。

しかしそれにも勝るほど、僕は彼女に心身を打ち碎かれているのである。なんとかして、打ち碎かれないように努力はした。だが、どうがんばってもダメだった…。

そんななかで階段を上る最中、つまり1階と2階の間で最後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「あゝあ、終わっちゃったね。これで今日も終わりっということだから…。」

時計を見ると四時前だった。

横を見ると、うんうんと頷いていた。な、なんだろう？

「あのさあゝ」

「うん？」

階段を登り切つて廊下に達した時

「今日さあ…。私と一緒に…」

僕はそこまで聞こえた。

なぜかというと邪魔する奴が前から現れたから。

「なっ？」

僕の胸近くまでしかない女の子が僕にタックルしてきた。

たぶん女の子は授業が終わってすぐに外に飛び出して来たんだろう。彼女はぶつかっても転ばず、そのまま僕をいなすように避けて、そのまま階段を4〜5段飛ばしで登って走り去った。何という身体能力。

「隆ちゃん!？」

僕はさっきの彼女のようにはいかず、横に回転してうつ伏せになって倒れてしまった。

「痛ててて…」

頭にキューティな天使ちゃんが回っている。

こけたらそれなりに痛いはずなのに、それほどでもない。

「ちよ、ちよっと!？」

なぜか下から声がした。どうなっているんだ？

「は、はやく…どきなさいよ…」

だんだんと声が力強くなっていく。

僕の下には柔らかいクッションがあり、右手の平には何かふわふわな物を感じとれた。もみもみしてみると、

「…ひゃっ！」

と効果音付き。そしてなかなかの弾力。

「っ！」

下の物が動き始めて、僕はやっと現状に気付く。

こ、これはマズイ!

「早くどきなさいって言うてるでしょうがっ！」

ガッシャーン

気づいた時にはもう僕は空中に投げ飛ばされていた。

軽くも重くもない僕の体が幼馴染によって投げ飛ばされたのだ。先ほど下に引いてしまっていたクッションは、幼馴染だった。どこか

らそんな力が？と疑問にも思ったのだがそれを言葉にしたら今度こそ終わりである。まあ今は言ってもいいかなあ？死にそうだし…。

「なんで今押し倒すのよぉ〜」

飛ばされている最中に幼馴染の顔が見えた。

数年ぶりに見た本気泣きだ。

ちよつと冷静になつてみる。こんな状況でも冷静になれる僕はスゴイ！…いや、このようなことがありすぎて慣れてしまったのか…。

それはさておき、考えたのだが、僕は倒れた時に彼女のある、手に収まるほどのもの触ってしまっていたらしい。もう1度手で確認。

うん、触り心地抜群！ありがとう。僕は最後に初体験を味わえたことに感謝感激です。では、さようなら〜。

と行きたかったがもう1人誰か知らないが見てしまった。目が合ってしまった。

幼馴染のいる階段の上り側。ちょうど落ち始めて幼馴染の顔が見えなくなった瞬間、斜めになったから見えたのだが表情が笑っていた。あざ笑うと言った方が良かったな。

とにかく僕はちゃんとその子の顔をじっくり覚えることにした。死にそうになつてる奴を見て、そんな表情をしているなんていつたいどこのどいつだ！

ドスン

後で幼馴染から聞いたがこんな感じの音が学校内をこだましたという。

頭からではなく、背負い投げのような感じで背中から地面に打ちつけられたため、死ぬことはなかった。だが、痛いには変わりはない。やっぱ死んだ方が楽なんだろうか。

それに落ちる前に記憶しといたはずのあの子の顔が思い出せない…。ただ笑っていただけしか思い出せない。強く頭を打ち付けたのか？

そんなはずはないのに。

さて僕は一回保健室にまわされ、包帯を巻かれた。特に頭。なぜかというと幼馴染が

「隆ちゃんの頭からこれ以上、ネジは抜けさせないんだから！」
だそうで…。

しかし、僕は特に痛むところも悪いところも全くないのである。こんな状態で帰り道を歩いていると出くわす人たちから見られて恥ずかしくてたまらない。

「ホントに、ホントにごめん…」

「別にいいんだって。痛くないし」

さつきからこの調子である。

「ねえ、2階から落ちて打ち所が悪いと、死んじゃうんだよ！一回精密検査しない？」

「だからさあ、もう大丈夫だから。けどさあ、僕も悪いことをしたからなあ」

幼馴染は僕を投げ飛ばしてしまったことを後悔し続けている。しかし原因は僕のせいだ。押し倒してしまったのがいけないのに、そこまで謝られると気のいいものではない。

「その…ごめん」

「えっ、な、なんのこと？」

なんか顔が赤い。

「お前が僕を投げ飛ばす前だよ。覚えてないのか？」

「な、なによ？ そ、そんなことなかったでしょ？」

なぜかそつばを向いた。もしかしてこいつ…。

「お前さあ、覚えてるだろ？」

「うんうんうん、全然！」

絶対怪しい…

「まあいいや」

なるべく気にしてないような態度をとる。こいつの態度を見るとおもしろい。けどまあ今回はこの辺でいいか。

「覚えてなくても、一応謝つとくよ」

「ふんっ！」

別に『ふんっ！』はいらないだろうが！

「…病院に行かなくてもいいから。それで、そのまんま家に帰るから。あ、そういえばさあぁ」

ちよつとしたことを思い出した。

「今日さぁ～お母さんが休みだって言ってたから、たまには一緒にごはんとかどう？」

これはいい案だと思う。この機会に仲直りでもどうかと思う。たまには使えるお母さんである。

「おばさま、今日休みなの？」

「だからねえ、ごちそうでもしようかなと思つてさ」

意外と僕は昔から両親のためというより、自分自身のためと言った方がいい。とにかく料理がうまいものを作れた。だいぶ最近ではシエフが作るようなものを試すようになった。

「前よりも腕は上がったんでしょ？」

「これには自信たっぷりだよ！」

「あのさぁ～たまに見せるその自信たっぷりな顔を私に見せないで、そ、そんなぁ～」

「じゃあ、ママに連絡つと」

携帯をとりだして

「……ママ、あのさぁ～…」

話し始めた。

そのころ僕は幼馴染の横で心にグサツと刃が刺さってしまつて立ち直るために必死だった。なんとかしてこの時間で立ち直つてやる！
「うん。わかったよ…い、いや！　～～ちゃんが誘ってくれたただけだって！　え？　今日こそはって？　そんなのあるわけないでしょ！」

いったい何の話をしているんだ？

そういえば、まだ言つてなかったが彼女のお母さんは僕のお母さん

の双子の妹の喜里子。つまり、僕と彼女は幼馴染であり、従姉でもある。

昔から僕たち家族は、共に過ごしてきたといっても過言ではない。家は隣同士。お母さんたちは姉妹であり、お父さんたちは非常に仲の良い幼馴染である。なぜか知らないが誰が見ても仲良しなのに、この2人は絶対そんなことを認めない。

僕たちは二人の両親に本当の子供のように育てられた。お母さんたちは仲がいいのに。

前に聞いたことが、お母さんたちを同時に好きになった父親二人は勘違いして同じ人を好きになっていたと思っていたらしい。だから告白時、下駄箱に手紙を入れて、同じ場所に呼んで、同時に告白。

告白の言葉も

「『ぼ、ぼくのこと、ことを…好きになってください！』」

「『？』」

お母さんたちはそのときあまりにもおかしくて、いきおいで承諾してしまったんだそうだ。この話を父親二人に言ってやると顔が真っ赤っかになってとつてもおもしろい。

「もう…。うん…うん、わかった。じゃあお願いね」

どうにかして話がまとまったらしい。

「じゃあ、早く準備するために帰らなくちゃ」

「いいえ。一応、ママは買い物するんだって。だから家じゃなくてこっち！」

こいつのお母さんは、僕のお母さんの何十倍も役立つってくれるから、どちらかというと僕はこいつの親の方が好きなのである。

「ほらほら、早く！」

元氣が出てきた幼馴染を見ているとこっちも元氣が出る。

第2話 第3章

さて、お母さんと連絡を取ると、開店時間から今もショッピングモールにいるらしい。もしかしたらばったり会ってしまうかもしれない。

そして偶然なのか、双子の意思疎通なのか彼女のお母さんはそこに行きたがっていたらしい。なんで2人して新しい物好きなのかなあ？僕は普通の商店街の方がいいけど。

「ちゃんと車で来てくれるから、色々いっぱい買えるよ！早く行つてなんか買わない？冬用の服とか」

「まあまあ。そう焦るなって！時間はいっぱいあるんだからさあ」女の子のこんなはしやぎ方には、なかなか男としてついていけない。理解はできるけど何と言うか、男とはまた別の感動があるんだそうだ。

でも、いつも学校で見せる強気な態度より、こっちの方が話しやすいし楽しい。昔のままが一番だな。

走っていった彼女に置いてきぼりになった僕は、信号が赤になって立ち止まる。

ちよつと運が悪い。

言つとくが立ち止まったことに運が悪いとは言っていない。この交差点で立ち止まってしまったことが僕の不幸だと思う。

そうここは、例のコンビ二前の交差点なのである。

なんでこんな不幸なところで立ち止まらなくてはならないのかわからない。

向こう側で幼馴染が手を振ってる。

「早く！」

「まあ待てつて！」

信号を確認してみる。横の信号はまだ青だ。

そして僕はそのまま幼馴染の方を向けばよかった。見てしまった。

見なければよかった！ 人間、何となく見ると言うことは、周りも何となく見ることになる。

横の歩行者信号の下には朝に会った女の子がこちらに向けてにっこりとほほ笑んでいた。いや、にっこりじゃないな、アレは。あざ笑うかのようだった。

この顔どこかで見た気が・・・

僕は彼女をじっと見た。彼女は笑いを向ける。信号は点滅し始める。聞くには今がチャンスだろう。

「ちよつと君！ 待ってて！」

どうしても僕は聞きたかった。なんかあるんじゃないかと思ったから。僕の人生が変になり始めた原因になってるんじゃないかと。いや、人に押し付けてるわけではないんだよ？

しかし僕は不幸だ。

僕は特に気にしないまま、車道で飛び出していた。もつと気にしろと自分に言い聞かせたい。パトカーのサイレンが鳴り響いているのに。

横を見ると一台の暴走車が僕と二メートルの地点にいた。

避けなくてはいけないから、地面に足が付いている方の足に力を入れる。

たった一回の足のけりでかけぬけようと思った。

ズルッ。

な、なぜだあ！ なんで石が！

大きくはないが、石が道路にあって知らないうちに踏んでしまっていた。そして変な風に足が曲がってしまったため、力が入らずそのまま前に転ぶ体勢となる。

あと一メートル。

前方では女の子がこちらに向いて口を素早く動かした。

「やっぱあなただメね」

だとさ……。う、ウザ！生きて帰ったらぶっ飛ばしてやる！

というかそんな場合じゃない！ 僕はあと少しでさっき見たが、泣きまくっている運転手の男に轢かれる。

だれか！僕の手を誰でもいいから取って引っ張って！

「了解しました」

へっ？ ……前を向くとそこにいたかのように、ブラックのスラックスを穿いた女性が立っている。

しかし、さっきの声は直接脳に響いてきた。実際にそんな言葉を発してる間に僕は引かれているから、ほんの一瞬だったのだと思う。

誰だ？ この美人？ いや、足しか見えてないけど美人だと予想できるほどの美しい足だった。

「では、お助けいたします」

グワッ！？

「なんで投げるんだよ~~~~~」

まず、上に放り投げられた僕は、下で起きていることを眺められた。放り投げられたと言ってもセダンの屋根１メートルほど上にしか上がってなかったが。

女性はどこからともなく、二本の日本刀を持っていた。

片方は屋根部分を削ぐ。

もう片方はタイヤ部分に軽く当てている。

車は走り去った後、屋根をその場に残し近くでスピンして電柱に当たり停止する。

僕はその場に浮いていた屋根に乗っかり微妙なクッションとなって地面に落ちる。

今の衝撃で少し腰が痛くなる。しかし、何とかして立つ。

「大丈夫でしょうか？ 顔に擦り傷だけ見受けられますが、他はどうでしょうか？」

さっきの女性が話しかけてきた。

「暴走車も停止させることに成功しましたし、一挙両得というものです」

僕はこの人に助けられ、暴走車も停止させることに貢献させてしまった。凄すぎだよ、この人。でもこの人、僕の名前を言ったよな？なんでだ？

そう言えば、あいつは？あいつはどこに行った？

周りを見回すと、暴走車を取り囲んだ警察官が警察を取り押さえている。そしてパトカーのサイレン音を聞きつけた野次馬が群がって来た。

女の子がいた場所はすでに群がった野次馬によって見えない。それとすでに、どこかへ行ってしまったのかもしれない。

「お困りの様子ですが」

まだいたのか！全然近くにいっても気配がない。ホントなんなんだ、この人。

そういえばちゃんと見ていなかったのか、目は少しすり目ではあるがアゴはシャープ、長い豪華な髪をカールしており、大人の女性が引き立てている。

「あなた様がお探しになられている者はこちらで把握しております」「ど、どうということなんだ？」

「私が先ほどから注意していますので、こちらへどうぞ」

僕の手を取ってグイグイ引っ張っていく。比較的野次馬の群がっていないところを選んだのか、すんなりその場から抜け出すことができた。

それよりも僕はこの事故をこの人のおかげで切り抜けることができたのだが、被害者ではあるのだ、一応…。今も腰が痛いし。

「腰など気になさらず、行きますよ」

「ちょ、ちよつとは気にしてほしいんですが…」

「そんなことはどうでもいいんです。早くなさらないと、あの方が逃げてしまいますよ？」

「が、がんばりますから、もうちよつと遅くはできませんか？」

「それは無理な申し出ですね」

本当に気にするそぶりもない。それにしてもだいぶさっきの交差点から移動したものだ。どこまで移動するんだ？

「どこまで移動するんですか？」

「もうそろそろです。もうそろそろ追いつきます。もう少しの辛抱です」

そのように言われて、たどり着いた場所には、女の子の姿が見えない。

しかし、周りを見回すと幼馴染と買い物をしに来るつもりだったショッピングモールがすぐそこに見える。周りにその建物以外は全くない場所で、少女を探しに来たというのにいったい何しに来たって言うんだ？

「本当にここ何ですか？ ショッピングモールなんかに来てしまつて……」

「正確には違いますが、目的地はここです。……ショッピングモール第3駐車場」

近くに縦横に大きいこのショッピングモールなので、第1駐車場に自動車が収まってしまふ。なのでこの辺一帯の駐車場には自動車は停められていない。ただ広い空間が形成されただけとなってしまうている。

第2話 第4章

「ようやく来たね」

後ろから声が聞こえた。入口からのようだ。

「遅すぎにもほどがあると思うんだけど」

聞いたことのある声だ。

「周りに人気もなさそうな場所と言うと、ここしかなかったんだ。別に森の奥まで入って行っても良かったのだけど」

振り向いてみる。

「さて、そろそろ私はやらなければならないことがあるから、隆明には手伝ってもらうよ」

そのまんまだ。先ほど見たのと変わりのない雰囲気を出している。あざ笑うような微笑みも今もしている。そんなに顔で名指しで言われるとなんかイラッとしてくるなあ。

「どこから話そうかあ。どうする？」

僕じゃなく、横にいる女性に向けて言った。

「自己紹介からどうでしょう。例えばどんなに頑張っても背が伸びないとか」

「な、なななにを言ってるの？」

完全に真っ赤っかだ。

「そ、そんなことは気にしないでいいからね？ とにかく私の名前は伊豆那よ」

彼女はそう名を告げてきた。見た目は小学生。髪は後ろに垂らし、頬はまだまだプニプニしている。まだかわいいの分類から離れられていないのか、美少女というよりハキハキした女の子に見受けられる。

それになりより、朝この世界に来て初めて会った女の子と全く変わりが無い。そしてさっき、横断歩道で見た子と同一人物。しかし顔

は、前にいた世界で最後に会った女の子とも変わりが無いのだが、
雰囲気が違う。どうしようか？ 僕は彼女に聞いていいのか？ さ
つきから知らんぷりしているのか、満面の笑みだ。

「私も申すのを忘れてました。エイルです。どうぞよろしく願
います」

なかなか自己紹介する暇がなかったから今ようやく、この美人の名
前を聞くことができた。彼女は無表情を貫いているし、言葉も固い。
だけど、彼女のような人はミステリアスで興味をそえられる。それ
で僕は今、彼女の名前が聞けて、ちょっぴり今日は、運がいいかも
しれない

「え、え」と僕は

少し恥ずかしくて、なかなか自己紹介にいい言葉が見つからない。
こういう時こそ男を見せろ、僕よ！

そんなつまづいている僕を見かねて女の子から

「隆明でしょ？」

「えっ？ 何で知ってるの？ 僕はどっかで名前言ったっけ？」
ハッキリ言って、覚えがない。

「どうして知っているんだ？」

「まあ、すこし言うのがね…控えときたいなあって思っただけど…」
「別に言いたくないんだったら言わなくてもいいんだけど…」

隠したいことは人間にはあるんだから、そこは僕も気にしてあげる
「伊豆那が言いたくないことはですね…ふう…」

エイルさんが一息つく。ちょっと重たい雰囲気が漂う。なんなんだ
る？

「は、はい」

「それはですね」

間をあけて

「ずっと隆明様のことを…観察してました…」

「……………」

ま、まさか…

「…………えっとそれはつまりその…ス、ストー」

「ストーリーではありませんっ!」

僕がいい終わる前に割り込んで来た。美人が顔を真っ赤にして『ストーカー』と叫んでいるところを見るとこちらがね…少し恥ずかしくなってくる。でも、まだ名を聞いて1分。すぐさまこんな表情を見ることができるとは。

それよりも、

「で、でも、なんで僕なんかを」

「い、言う訳がありませんっ!」

拒否された。

「じゃ、じゃあ…聞きませんけど」

たぶん僕のが好きでストーカーをしてたわけではないと思う。だから聞かなくていいと思う。これ以上みているのもなんだから。

「そ、それも困りますっ!」

ハアアア?

「なんか言ってることが逆さまなんですけど?」

もう顔の穴という穴から蒸気が出ている。この表現には間違いはない。だ、だいじょうぶか?

「ここまで赤くなったエイルさんの顔、初めてみたよ! とつてもすごい貴重な体験ありがとっ!」

誰でもそれに同意じゃあないだろうか? こんなに美人の顔が変わると思ってもみなかった。僕にもとても貴重な体験ありがとっ!

「なに、2人して笑っているんですかあ!」

声が裏返ってしまうほど、恥ずかしかったのだろう。さっきのことは謝った方がいいのかもしれない。でも今の状態がかわいいからもう少し。

「も、もう言っちゃいますっ！」

「言えることだったんですか？」

まさか、逆ギレした流れでポロリ吐くつもりじゃないだろうかと思
つて、すかさず突っ込んでく。

「そうですね！ さっきの流れであんな風になってしまったのです
が！ 今言わないと隆明様に不幸なことが降りかかってしまうので、
早く言わなくちゃいけないんですっ！」

「ふ、不幸？」

妙に引っ掛かる言葉を聞いてしまった。

「覚悟してください！ 少し待ちます！ ……いいですか」

「えっ…」

「ちょ、ちよつと待つてください！ 早すぎです！」

「いいですよね！」

全く聞いてねえ！

「隆明様はこの世界の人間の中でも不幸の分類に入り！ あなたは
その分類された人たちの抽選で当選されてしまった人なんですよっ
！」

「言葉の意味がワカリマセン」

どういうことだ？

「それはそうだろうね」

僕の顔を覗き込んでくる少女の顔を見ると、何かイライラしてく
る。その顔やめろつつうの。その顔！

「簡単に説明するとね…あ、休んでいいよ、エイルさん。よく頑
張ったと思うよ、私のために。ウフフ…」

「…笑わなくてもいいのではないですか…。えっと、お言葉に甘え
て…」

プシューという音がして、この駐車場の入り口近くにある自動販売
機に向かって歩いていく。肩を落としてしまっている。そんなに嫌

だったのかなあ？

「じゃあ、話の続きね。まず私たちの存在からちゃんと話した方が良かったんだろうね。まだ自己紹介もちゃんとしてないからどうしようかな」

「なんか言いづらいこともあるの？」

「そういう訳じゃなくてね。お兄さんが聞いててもあまりおかしくない、簡単なことから話したいんだよ。私たちは特殊だから」

小さい子に難しい話をされるらしい。小学生から高校生である僕が教わるのって、いったい何の恥さらしなんだろうか？ それに僕はバカではない。頭がいいわけでもない…

「簡単なことって言うのと、どのあたりのことを指すの？」

「うっっん、そうだね」

だいぶ考えている。そんなに難しいのか？ 別にこの子が考えていることは案外自分にとってなんの変哲もないことだったりするんじゃないだろうか？

「じゃあ初歩から」

「うん」

「隆明は宇宙人や神や悪魔が今この世界の目の前にいてもおかしくないことを知ってる？」

前言撤回。うん、難しいね。無理だ。僕の頭ではカンガエラレナイ

ヨッ

「おっっい？ 大丈夫？ うっっん、もっと簡単なことあったかなあ？」

だいじょうぶじゃない…。そんな言葉をもっと冗談ぽく、言っただいいじゃないか！なんでそんな真面目な顔してんだよ…

「学校でも見たけど、その顔はマズイよ…。早く戻ってきてよ」
今の言葉は聞き取れたぞ！ 理解もできるぞ！ 今の顔がヤバいと。

僕の今の状態の顔っていったいどうなっているんだろう。今日幼馴染からも注意されたが、相当なアホ面に決まっている。彼女の顔の方を見ると、憐れんだ顔になっている。ち、ちくしょう…。とか、なんで知ってるんだ？ まあいいや。

「あ、戻ってきたようだね？ 理解できた？」

「まあ、僕の顔が本当にマヌケな顔だということだよな」

「そ、それもあるけど…。そっちじゃないっ！」

「宇宙が回ってる」

「だめだこりゃあ」

冗談を言っただけなのにさあ。『もうだめだこいつ』的な顔しなくてもいいじゃん！

「で、宇宙人が何だって？」

「宇宙人が重要じゃないんだけど、まあいいかあ。変な例えをした私が悪かったかなあ」

「どれが重要な？」

「もうちよっとランク上げるけどいい？」

「どんとこいや」

体に力を入れる。どこからでもかかってこい！

「『私は神様の種族に分類されるものだ』と言ったら？」

「そんなはずがない！」

「…別に即答しなくてもいいんじゃないかな？」

今度は正常状態での完璧な解答だった。これで僕はバ力ではない。

どんな奴でもバ力と言わせないぞ！

「本当のこと言ってるのに、全否定されちゃたら私も困るんだけど…。もしかして…あなた本当は、相当なB A K Aなんじゃあないの？」

な、なぜだ…そんな…『バ力』を回避してくるなんて。ち、ちくしよ…。

あ？ 知らないうちに自動販売機で買ったのか、缶3本を抱えてくさんがこちらに歩いてきた。もう大丈夫なようだ。

「けっこう大きな声での会話でしたね。なので私も良く会話の内容を把握しました」

この少女の話を唯一理解しているのかもしれない。もっと簡単に僕に説明してください。

というわけで、

「どんとこいや」

「では、私のことですが、本当の姿は天使です」

「あなたはまるで天使のようだ」

「……ポッ」

えっ？ な、なんの音？

「あ、あのくお兄さん？ 変なこと口走ってるし…というか、二人とも！ なんか頭から湯気が！」

変なこと？ 僕は今なにか変なことを言ったか？ なんてそんなにくく、慌てているのかわからない。

「そ、そんな…恥ずかしいことを…言われましても…ああああああ！」

「ちょ、だ、大丈夫、くくさん！？」

背筋を伸ばしたまま後ろに倒れそうになったのを地面スレスレで少女が支える。この構図、2人が逆だとかっこよく決まるんだけどねえ。

なんかというか、倒れているくくさんの顔を見ると、いつもの表情と違って案外かわいいんだね、天使のくくさん。

「天使のことだけはちゃんと信じるんだね」

ああ、今そうやって失神している、あなたのその柔らかい谷間にダイブしたくてしょうがないのです。

「それだけはやめといた方がいいよ！ 隆明！？」

その柔らかそうな唇、柔らかそうな谷間、ワシツカミ出来そうなお尻を僕はあなたから奪い去りたい！

「隆明っ！ な、なにケダモノみたいなこと言ってるの！？」

さつきからうるさいなあ〜！ 僕はこの天使ちゃんと2人で一生過ごすんだ！ グヘヘヘヘヘヘ。

「だ、ダメエエエツ！」

愛しているよ〜MY〜

グハアツ？

「な、なにをするんだ！ 突然殴るなんてひどいじゃないか！」

地面に〜さんを寝かせて、わざわざ立って頬を殴って来た。それもお前、ちょ、頭から湯気がっ！

「キリストは言ったのです。『右の頬をうたれたのなら左の頬も差し出さない』と」

「そ、それがどうした？」

「ほら、早く出しなさい！」

グハアツ？

「出す前に殴られるっておかしくないか？」

左の頬を素直に差し出そうと思ってやろうとしたのに！

「そんなことはどうでもよかったの！ 今、私が隆明に言いたいことは、ただ一つ！」

「なんだよ……」

なんだよもう……。なんか神様を気取ってさあ〜。子供なのに。僕は小さい女の子には興味がないの。やっぱ美人がいいよなあ〜

グハアツ？

「言つとくけど妄想がただ漏れだよ？ それにキリストはこんなことも言つたんだよ！ 『両頬を殴られたら全身全霊を使い相手を受け止めなさい』ともね！」

「それは聞いたことがないんだが…？」

僕は疑問に思う。こいつただ単に僕を殴りたいだけじゃないか？

「というか、ただ漏れつてどういうこと？」

「やっぱ自覚ないんだね…」

さつきから僕は普通にエイルさんのいいところを考えてたけど、ただ漏れつてどういうことだ？

「どんなこと言つてた？ そんな変なこと言つてないよな？」

「ちゃんと真似して言つてあげる！ 『天使ちゃんマジパネエ！』だそうですけど！」

「ギヤアアアアアッ！ そんなこと、頭で考えてねえええええええっ！」

こいつ嘘を言つてんじゃあねえか？ なんで僕がそんなことを？ おいおいそんなでつ上げた嘘を言つんだ？ ……というか、本当に僕がそんなことを言つてたら？ なんかヤバいんじゃないか？ 世界から抹消されてもおかしくないんじゃないか？ おいおい、どうすんだよ、僕よ！

「なんか急に狂つたように話し始めたから、ホントに隆明がダメ人間確定しちゃったんじゃないかと思つたよ」

「言つてない 言つてない 言つてない 言つてない」

僕は自分を信じるよ！ せめて僕自身だけでも！ 僕だけが僕自身の本当のことを知ってるんだ！ 絶対そうだ！ 絶対…。

「はっ！ 私、いったい…？」

「あ、大丈夫？ エイルさん」

スゲエ。いきなり九十度に曲げるなんて。

「なぜ私は地面に寝てるのでしょうか？」

「まあ色々あつたんだよ」

「伊豆那。どこまで話したのですか？」

「ぜんぜん話してないんだよ…。あんまりにも隆明がバカだから」
ちよい待てよ。こんな話をすぐ理解できる奴なんてそうそういないんじゃないか？

「そこはバカって言わないでほしいんだけど。でもゴメン。たぶん頭がパンクしてたんだと思う。今思い返すとね」

あんまり覚えがないけど、僕のせいでエイルさんが倒れたと思うから、一応嘘をついておく。

「やっとわかったんだ！ さすがにあんなに恥ずかしいこと言っておいて顔が赤くならない隆明は、どっかしらイカれてるのかもね？」
「おい！」

せっかく謝ったのにそんなことを言われる筋合いはないんだけど…。
「そんなことより早くした方がいいのではないのでしょうか？ ここに長居してしまうと隆明様の生活がありますので」

「それもそうだね」

第2話 第5章

「一応、私たちの正体はわかったよね？」

「神様と天使ね」

信じていいのか分からないけど…。

「次にですが、私たちがなぜここにいますかです」

「もう、面倒くさいから全部言っちゃっていいよ」

「伊豆那。いいんですね。あなたのあれやこれやを言ってしまったっても？」

「言うな！ そんなの抜いて早くしてよ！」

「そんなに怒らなくてもいいのでは？」

この人。そんな無表情で冗談を言われても、こちらだけが困ってしまっただけです…。

「まあいいです。最初から簡単に説明しますので、真剣に聞いてください。そうでないとい先ほど言ったように本当にあなたが困ったことになりますので」

「は、はい」

そんなことを言われるとピシッと聞かなくてはならない感じがしてしまっただけ。

「伊豆那のいる神様の世界でなぜ抽選したかという点、伊豆那のためなのです。伊豆那は隆明様のためにこの世界に来たのです。隆明様は『不幸児』として生まれたのです。『不幸児』とは、ハッキリ言って不幸ばかりの人生を送る人のことです。そしてこの世界には不幸児のついでとなる、幸運児という種類もいましてこの世界にはどちらにも必要な存在なのです。しかし、これは二十歳ぐらいまでのことなのでそこまで気にすることはありません」

一息つく。今のところほとんど分からなくはない。

「しかし、たまにどちらかが多く生まれてきてしまうことがあるのです。数十年に一度くらいなんですが、この状態になり始めますと、

もうだいぶ現神様の力が切れてきているのです」

「その展開だと、もうそろそろ今の神様の力がなくなき始めているということですか？」

だいぶ、頭が回り始めた。

「はい、そうなんです。なので、代わりとして次期神様を育てなくてはならないのです。それで今回、次期神様候補として伊豆那が選ばれたのです。しかし候補であつてまだ正式になることができないのです。どうすれば良いかというと、人間と同じように実績が必要になるのです。その実績がそのまま影響するのです。その実績とはこちらの世界で、自分の頭を駆使して何か人間のために成し遂げることで評価されます」

なるべく難しいことを話さないでくれているのか、楽々わかることができる。いやゝゝホント助かります、エイルさん。

「じゃあ、何をするんですか？」

「私たちは今回の神力の減衰によつて増えた不幸児である人の人生を変えることを伊豆那が考えたのです」

そんなことをこいつが？ 伊豆那の方を見ると、そつぽを向いている。まあ……いいか。

「そのため、不幸児の人たちを抽選して当選された隆明様の人生を変えて幸運児にしようと考えたのです。」

「変えることはできるんですか？」

「実際にはやつた者もいるので大丈夫でしょう」

「はあゝ？ えつと、いつから僕の人生を変えているんですか？」
もしかして……。

「隆明様と決まつたのは約1週間前です。しかし、私たちは隆明様を主観としたら、一昨日前から観察を開始。今日から行動をしています。たぶん気づいてるのではないかと思いますが、あの事故からです」

「やつぱそつか……」

何となくわかつていた。なぜなら、今日から僕の人生がめっちゃくち

やになったから。どうみても死にそうになったり、死んだり、色々ありすぎたと思う。

「しかし最悪ですね。あの事故で僕は1回死ぬんですよ？ あの事故がなければ僕はこの日常が平穩に暮らせたのに。あそこで助けてくれればよかったのに」

「そうなんです。私たちはあそこで隆明様がこの子を助けて、とってもハッピーな日常を暮らしていつてもらいたかったのですが…。まさかあそこで本当に事故に会うとは思ってなかったの」

「おい！ 仕掛けてたやつらが把握してなくてどうするんだよ！」
「ヤバッ！ なんか口から出ているし。」

「まあまあ、熱くならないでください。それですね、さすがに死んでもらうては困りますので時間を少し巻き戻させてもらいました」
「時間ですか…？」

「はい。時間をあの事故を起きる前に戻させていただきました」
「んっ？」

「まさかですが、今僕がいる世界は元いた世界とは違いますよね？」
「いいえ、別に転生したわけではありませんので元いた世界のままですが」

「そ、そんなあ…！」
「いうことは…。誰も変わってなかったことになる。クラスの奴らの本当の裏側を見てしまったことになる。そんなバカなあ…みんなあ…！」

「そして、すっかり忘れていたのか知りませんが、私たちは今日が始まる時にも、この世界全体にあることを仕組んでおいたのです」
「あることってなんですか？」

「世界全体に？ えっと…そんなに大きすぎることなんて僕にはわかりません。わかるはずがない。」

「自分自身に起きたことの方が印象に残りやすいのはわかります。しかし、私たちは時間を戻すことができたのです。何か疑問を持つてもおかしくないのでは？」

こんな時に考えてしまうのもなんだが。

「疑問と言えば、本当に神様は万能なんですか？」

「難しい質問ですね。これについては答えません。答えたところでまた〳〵様は理解できないと思はれます。そして今現在の話がズレてしまっています」

「エイルさん。内心は『そんな質問考えてないで、もうちょっと人生を見つめなおせ！ あ、でも、見つめなおせるほどちゃんと人生を生きてないからわからないのは当たり前か？』だそうですね？」

「ホントすみません…」

全く駄目ですね…。

「そんなことは思わなくていいです。それですね、さきほどの答えですが『時間のループ』です。意味がわかりますか？ 言葉そのまの意味です」

「ちゃんとわかってますから大丈夫ですって！」

ん？

「…ということは、今僕のことを不幸に叩きつけているのはあなたたちだったんですか！」

「まあそういうことです。しかし、すみません。なるべく私たちも裏で頑張ったのですがなぜか不幸が連続して起こってしまうのか分からないのです。変えることができるはずなんです」

本当にそうなのか…。なんか引く掛かるんだよね…あつ！

「それでなんですが、疑問があります」

「何でしょうか？ なるべく意味のわかるように言ってください」

「ちゃんと说不いと怒るってさあ…。ミスらないでね？」

なんか、質問しづらくされた。困るんですけど…。

「…えつと〳〵なんで僕のために時間をループさせてるんですか？」

「それはですね…」

「その話、俺たちにもわかるぐらいに簡単に話してくれないかあ」

？
「

この駐車場の入口の方を見ると長身の男がいた。まるで今までずっといたかのような雰囲気が出まくりである。

第2話 第6章

「今、俺の注目ワードは『時間』、『戻る』、『能力』なんだよねえ！」

なぜ、ピンポイントに注目ワードが僕たちの話していたことと合ってるんだ？ さっきの話聞いてたよな、この人。

そんな見え透いた嘘をつかなくてもいいのに。

「えっとー一応聞いとくけど…あなたたちはいったい何者？」

長身金髪男の異常なほどの雰囲気圧倒されながらも…が聞いてみる。なんか別に無視しても良かったんじゃないだろうか？

「うん？ おれかあ！ 俺はだなあ…」

「言わないでえっ…！」

な、なんだアレ？

「むごあえだうえぎ」

「はあ…はあ…はあ…」

長身金髪男の後を追いかけてきたのか、着物を着こんで頭にはかわいい白いニット帽を被っている。少女が走りこんできて必死に後ろから男の口元を手で押さえこんだ。というより彼女が必死に飛び込んで彼を押し倒してしまう。男の方は不意打ちだったために顔向けから倒れて受け身ができてなかった。痛そう…

「なんで先行っちゃうんですかあ！ はあ…はあ…はあ…」

「お前に放置プレイをしようと考えたからなあ！」

「や、やっぱわざとだったんですね！ ハア…走りづらい着物をハア…ハア…着ているんですよ！」

「そんなことであきらめちゃダメだぞっ！」

「もうちょつと気にしてください！」

完全に突如現れた2人に話を持っていかれた。なんか彼女の怒った顔が案外かわいい。

「えっと…仕切りなおして…あなたたちはいったい何者？」

がんばって2人の話の間に――が割り込む。頑張るねえ。

「その問いについてはおハア、答えできませんハア、ハア、私は秘密主義がハア、ありますのでゲホッ」

「そんなのあったんだなあ？」

「私にはあったのでゲホッ、ゲホ」

「あの――一回息を整えたらどうですか？」

「ちょっと気を利かせて提案してみた。」

「そんなのは必要ないぞ！　こうむせ続けているのもなんだか……うん、いいなあ」

今、この男、何に浸っているんだ？

「ハア、ハア、わ、私も……大丈夫ですから」

「でさあ、何を話そうとしてたんだ？」

「フウ。それはですね、元々近くに隠れて聞いているつもりだったのですが、この人のせいでもなにもかも作戦がズタズタですよ！　そうしていれば必要な情報だけ聞いとく事が出来たのですよ！」

せこいなこの少女。印象的にもうちよつといい子だと思ったのに。

しかし、男の方は逃げも隠れもしないで現れた。立派なのはいいが……。もうちよつと考えて行動してもいいんじゃないかな？

「じゃあ今からでも隠れようじゃないかあ？　そちらは気にしないで話して結構ですんでっ！」

「そういうわけにはいきません！　あなたたちは聞いてはいけない言葉を聞いてしまっているのではないでしょうか？」

「ああ、こいつのおかげで場所を特定してもらって、すぐに駆けつけたからなあ！　それで俺はお前たちに解決したいことがあるんだなあ！」

特定したって、こいつらいったい何者なんだ？　なんかすごい能力でもあるのか？

「解決したいことは……」

「さっきおまえたちが話してたことについてだあ！」

「『時間のループ』についてか…」

「私たちはただ1日戻っただけだと思っただのですが、まさか『ループ』をさせているとは思ってもみませんでした」

「たったの1回だけなら見過ごしたんだけどなあ。どうしても俺たちは明日が来ねえと困るんだよなあ！」

さてどうしたものか？ この人たちは僕と同じ境遇に会っているんだろう。今日1日だけでも相当大変な日々を過ごしたんじゃないだろうか。しかし、仲間と言うわけでもなさそうだ。彼らはなんか別の何かが後ろについている気がする。

「どうしてだろう…私たちは一般人に気付かせないように仕掛けたはずなんだが」

「あの方たちは一般人に引つ掛からなかったのでしょうか。男性の方はそれほどでもないのですが、女性の方が異常な気がしますね」

「私もそうだ。でも、何なのかが分からない…」

この2人で変な会話を始めた。僕を置いていくつもりか？

「あのさあ…僕にもわかるように説明して欲しいんだけど…」

「了解しました。〵〵様」

さて、聞いてもわかるだろうか？

「ちやつちやか説明すると、あいつらは地球防衛軍に所属してて、未知との存在と毎日戦っているんだよ！ だから私たちも標的にされちゃったんだよ！」

「ま、マジで？」

じゃあ結構ヤバいんじゃないか？ 全然焦った態度を見せないけど…。

「いいえ違います。あの方たちは地球を占領するのを目的とした宇宙人なのです。彼らは地球のことを学び、人間よりも早く神の存在に気付き、私たちに接触したのでしよう！」

「や、やっぱすごいんだな！宇宙人！」

「何勝手に妄想に浸ってるんですか！」

少女がキレた。

「宇宙人かぁ！ 考えてなかったぜえ！ エイリアンみたいに唾液で少しずつ服を溶かし、体を痛めつけたり〜！」

変なことを考え始めやがった。いったいこいつの頭、大丈夫か？

「それになぁ〜透明になつて逃げ惑う奴をナイフで少しずつ、少しずつ切つていくのもいいよなぁ〜！」

「……」

「無視していいです……」

少女の方ももう諦めているらしい。かわいいそんな長身金髪男。

「それに、私はあなたたちが考えた変な妄想の方々とは全く関係はありません！ どっかの口から変な液ばっかだしてるのとか、透明になるエイリアンでもありません！ そしてどっかの正義のヒーローでもありません！」

「それしか思いつかないんだけどさぁ〜何も特徴もない、胸がペツタンコなやつにはね！」

「〜が挑戦的な笑みで言い放つ。そんなこと言っているのか？ 〜だつてないだろ。」

「べ、別に胸がなくてもいいんです！」

「あんなやつと一緒にいても、不釣り合いだよ」

「私にも、ちゃんとした自慢できることがあるんですから！」

「それってなんだ？ 言ってみるよ？ もしかして言えないのか？」

「そんなことはありません！ これです！」

彼女の頭にのっているニット帽を取った。なんでそれを取るの？

何かあるかというとなんにも見えない。

「何も無いじゃん！」

「よく見てください！ これです！」

彼女が髪の毛を掻きわける。

うん？ 何かあるのが見える。しかしなんだ、あれ？

頭の上には、少しとんがったツノが覗ける。

「ツノ…でしょうか？」

「そうです！ ツノです！」
きっぱり言ってきた。

「えっと……オニ？」

「オニじゃないです！ エンマ！ 次期閻魔の紗羅です！」
ああ、閻魔様ね。閻魔様…

「ハッ！ 何を言ってしまったのでしょいか私は！」

「だいぶ熱くなってたからねえ」

「うまく吐かすことができたぜえ！」

「作戦勝ちです」

「まんまとのっかるなんてなあ〜お前つてやつぱ〜」
順に、僕、伊豆那、エイルさん、長身男。

みんなから言われて真っ赤になっっている彼女は男の声を遮って

「そ、そんな、こと！…ないです…」

声が沈んでいく。なんかかわいそうになっていく。

「で、なんで、次期閻魔がここにいるんだろっね？」

「それは僕も」

「もういいです。なにかも話しますから」

第2話 第7章

「まあ理由はそちらとあまり変わらないですよ。現閻魔様がなかなかの問題を抱えているんです。仕事もうまくいなくて地獄が全く回らなくなってしまうたんです」

「そういえば天使界にもそんな情報が回ってきてましたねえ」

「どんなことが起きたの？」

「地獄に來られた方がかわいそうだということで、

『皆さん！ 天国に上がってよろしいです！』

などと言ってしまったて…。そんなことを言ったおかげで各方面に謝罪。それになりより、地獄にいた者たちに誤解が生じたために、暴動が起きてしまったのです。それを抑えることはこちらでも大変でした。なにせ、死ぬことのないゾンビのような者たちが必死にこちら側に殴りこんで來たのです。なんとかして抑えましたが、今の閻魔は責任を取って解任。そのため、閻魔の補佐をしていた私が次期閻魔として選ばれました。ですが私は補佐以外やったことがなかったため、この世界に送られ研修をさせられているのです」

「んなわけで、俺、九条有斗が先生となっているんだなあ！ でもよう別に教えることがねえから、何にもしてないんだけどなっ！」

そこは自慢する所じゃないと思う。

「しかしそこまでひどいとは…」

「ひどいのか？ なんで？ 別にかわいそうだと思ったからやったんだろ？」

「はあゝわかってない、わかってない」

伊豆那が睨んで來た。何か間違いでも言ったかよ！

「そんな奴がどの長になっても、そこはいつか終わっちゃうんだよ。たいいてい、自滅だけだね」

「わかりやすく説明します。重要な役職に着いたものはどんなことでも情に流されてはいけないのです。そんなことは多分人間界でも

同じなのではないでしょうか。まだ、人間界では情がある方が良いこともあるかもしれない。しかし私たちのような存在は、絶対、情に流されるとなにもかもが狂ってしまうんです」

大変なんだな、彼らも。

「そんでさあ！だいぶ話がズレたから戻すんだけどよあ！」

今まで彼女の顔を見てにやにやしてたのに、急に目をすばめて――を睨んだ。

「今すぐこのループした世界を戻せ」

それだけ言った。

その言葉には今までの陽気なオーラが出ていた彼から出てくるのかというぐらいの変わりようだった。これにはとてもじゃないが直視できない。直視してはいけないとそう僕の心が訴えている。何かこれについて、とてつもない理由があるんじゃないかと思う。僕は別にそのことに対して、そこまで気にしてなかったが、彼にはとても重要なことらしい。

「なんでそこまでして戻したいの？」

伊豆那が少し強気な態度を示す。まだ理由は聞いてないが、たぶんこうしていることは僕に関係しているんじゃないだろうか。さっき僕のためにこちらの世界に来たと言っていた。

「私たちは、隆明の人生を変えるためにやってることだ！ 隆明がいつもやる気のない一日を過ごしているから、一日の大切さを知って欲しいからやっっているんだ！ それをわざわざ神に申請してまでやってることなんだから、もう少し我慢して欲しいね！」

神に申請？ こいつ、まだ神としての能力がないのか？

「それは無理だ。絶対にな！ 俺たちにだってなくちゃいけない物があるんだよ！ なんだかわかるか？」

彼は一言、一言に重さを与えながら話していた。

「それはだな？ 『昨日』『今日』『明日』というものが必要なん

だよ、次期神様」

だいぶ顔を近づけて言い放った。

「お前らだけでこの世界のことを考えてんじゃねえよ。この3つがこの世界にとつて重要な物になっているんじゃないのか？」

「必要な要素ではありません」

どんな奴が来ても無表情で対応するエイルさん。

「必要なんだろ。じゃあ、わかっていているだろうが！」

こんなに迫ってくると、もう隆明は涙目になってしまっている。

「こ、この世界を作っている神様は、ひ、一人ずつに救いの手を差し伸べるんです！」

「ああ、そうかそうか。まさか…たった一人のためにやったことで犠牲になっている人もいることを知らないとは言わねえよな？」
疑問を投げかけてくる。

「あるさあ！ それはだね！ こいつがつまらない人生を送っているのを変えてやらなきゃいけないから！」

「たった一人変わるだけでそんなに変わるとは思わねえな！ あいつに対してそんなにする必要がどこにある！ 俺たちは俺たちの明日があるんだ！ それを捨てられるほど甘い奴なんていないんだよ！」

ごもつともだ。とてもじゃないが、彼の言っていることはどう見ても筋が通っている。

「『昨日』『今日』『明日』の重要性はわかっているだろ？」

「あ、ああ！ わ、わかっているとも！」

だんだん押されぎみになっている。大丈夫か？

「じゃあなぜ『明日』が来ねえんだよ！ みんな一度は明日が来なくてもいいと思ったことがあるはずだ。テストとか発表会なんかだろうな。しかしな。みんなは自分では知らないうちに、『明日』に対して期待を抱いてんだよ！ そうじゃなきゃ明日を生きる価値もなくなってしまうんだよ！」

「うっ…。」

どう見てもの負けだ。せつかく僕のために頑張ってくれたのに、僕は全く彼女の助けになれてない。

「あのくもういいから…僕のことで構わなくていいから」

「『お前は黙ってる！』」

なんで2人でハモるんだよ！　せつかくこんなことを早く終わらせてあげようと思ったのに…。そこまで拒否んなくていいだろ！

「もうくいいや！　別に誰かに言われたからってやめないからあああっ！」

くくの顔が完全にグチャグチャになっている。違う意味で迫力がある。

「もうこれはなあく実行使だなあ！　そうしないうこと聞かなそうだしく無理そうだからなあくどうだあ？　バトんか？」

どうすんだよ…。相手はやる気満々の顔で、手でどつからでもかかってこいやのような仕草をしている。

「やってやろうじゃんっ！」

おいおい…。なんでやめないんだよ…。なんかどちらも勝つ気満々なんですけど…。

「そうじゃなきゃなあ！　さくて、やろうじゃねえかよ！」

「待ったっ！」

完全に殴りかかるうとしていた男が、ギリギリのところであの顔の前で止める。

「なんだ？　怖くなったか？」

「そんなことないっ！　私は戦っちゃいけないのっ！」

「……ハア？」

「……どういう意味だ？　さっき戦うと言っただろうが。矛盾してんじゃないかよ！」

「ちゃんと理由はあります」

エイルさんが2人の間に割り込む。

「伊豆那は今、研修生としてこちらの世界に来ていることを聞いてますよね？　私たちのようなこちらの世界でないものが直接戦って

はいけないことになっているのです。そうですね？ 紗羅さん」

「はい。私たちもそう決まっています。わかってくれますか？」

次期閻魔様が男に向けてそう言った。彼は納得がいかないのか、舌打ちをして

「じゃあなんで戦うつて言ったんだ？」

僕もそこが気になる。どうすんだ？

「もし戦いたいのでしたら伊豆那のパートナーである隆明様とお戦いください」

そんな手があるんだなんて気付かなかったぜえ……

「なんで？」

ぼつかりと口を開けてしまった。

「なんで僕が戦わなくちゃいけないの？」

「パートナーだからです」

「……すみませんが辞退します。負けたことにしていますから」

こんなのいつまでも付き添っていなくていいだろう。

「それは無理です。パートナーが決めてしまったので連帯責任です」

「だそうだぜ？」

アハハハ……早く殴られて終わりにしてもらおうと。

「そういえば、パートナーである私は協力してもよろしいでしょうか？」

閻魔様がそんなことを言った。

「手助けぐらいならば大丈夫です。直接相手に何かすることは禁止です。あくまでパートナーに対してだけです」

「それならばやらせていただきます。いいですか、そのままです、ください」

何をする気だ？

彼女がゆつくりと顔を下に向けて喋り始めた。

「地獄に申請。拷問道具をまず「解体バサミ」を呼びます。……許可ができました。それではどうぞ。下にご注意ください」

男の前あたりにいくつもの円が重なり下にめり込んでいく。黒や赤

が混じって穴を作っている。まるで地獄の門が開くような穴。どこまでも続く穴だ。

「な、なんなんだ？ 何かがこちらに来てる」

下から何か白い点がこちらに向かってやってくる。それも高速で。

そして僕たちの前に現れたものが急停止し、男の前で浮遊している。

「地獄の中でも鬼たちが愛用している金棒よりも戦闘向きなのでこれを選びました」

さすが閻魔様。白ではなく銀の誰でも使ったことのある普通のはさが浮遊している。しかし大きさが十倍ぐらいなところを抜いてくればな。あんなのが地獄で使われているのか？ 嘘のような気がして仕方ない。

「これで戦えと？ まあないよりいいよなあ！ じゃあそっちはどうすんだよ？」

「そうだよ。どうすんだよ？ 何か武器はあるんだろ？ 出してくれよ」

「そんなのないよ！ 自分の力でがんばりなっ！」

「ちょ、お前、それはねえだろが？」

待て待て待て待て待て……無理だろうが！ 相手は武器を持っている。僕武器なし。勝負みえてんじゃん！ どうすんだよ！ うまく逃げられなくて死ぬかもしれないぞ！

「特になさそうだし、やろうじゃねえか！」

急にハサミをつかんでこちらに向かってきた。

「おいおいおいおい！ まだだれも開始の合図だしてないんですけどっ！」

うまく後ろに飛んで避ける。よく見たらまだハサミを開かず、さっきのはただ地面に叩いただけだった。

しかし地面がくぼんでしまっている。どれほどの力使ってたんだよ、こいつ

「ほろあ！ 逃げてないでよぉ、正面からやられにこいつつんだよお！」

「そんなの無理だつて！ 僕はそこまでの勇者じゃないっ！」

今度は横に振ってきた。さすがに避けれない。横腹に食い込む。刃が出てないおかげでバッドで殴られたような感じになって、横に吹っ飛ばされる。

「おもしろみがねえや。なあ？ こいつの首切っていいかあ？」
地面を転がって、やっと止まる。

だんだんとこちらに向かつて歩いてくる。大きいハサミを開けるのに苦労していたが、開けた瞬間の音で僕はちびりそうになった。いつも使っていた時の音が低くなるだけでこんなに恐ろしいのかと思うほどだ。

「なにしてんのっ！ 開始してまだ全然立ってないじゃんっ！」

「僕だつて殺られたくないんだよ！ だからなんか出してよっ！」

今思ったが、なんか眼鏡をかけた小学生五年生のダメ太君が青い狸に頼んでるのと同じことをしてることに気付いた。もしかして僕は、あんな奴だったのか！ 絶対思いたくない！ そんなわけがない！

「まだ首を切るのも盛ったねえからなあ！ ここだけもらうぜえ！」

僕の右腕を挟むように刃を地面に刺す。そして地面を掘りながら刃が締まっていく。

グシャ

「ぐわあああああつああああああああああ！」

瞬間的に抜こうとしたが、ちょうど手首のところで挟まれた。そして彼は唸りながら思いつきり力ずくでハサミを閉じた。楽々男は僕の手首を持っていくことが出来てしまった。たぶんこれが骨のある部分になっていればまだ良かったのかもしれない。

「さてどうすんだあ？ パートナーがこんな状態でもいいのかよお！」

苦痛でもがき回る僕を見下して男は、さらに僕のもう片方の手、左手首も切り落とそうとして刺してくる。

さすがにこれはヤバイ！

そう思つて僕はその場から立つて走り出す。危機一髪で大きいハサミの串刺しから逃れる。男はハサミを地面に思いつきり刺したために、抜くのに困っている。そのうちに逃げなきゃ！ マジでヤバイ！ このままいけば出血多量で死ぬ！

「おい！ どうかして僕を助ける！ 出血だけでも止めてくれ！」

「大丈夫だから。そのうち止まるよ」

「全部体から抜けてな！」

こんな場合じゃないのになんで僕は突っ込んでいるんだ！ 正気か？ 正気なんだろうか？ 正気だよな！ 正気だ！ 絶対にだあつ！

ヤバ…頭がもうろつとしてきた…なんか言い残す言葉を考えとかなかったなあ。というか、今までもう三回も死にそうになっているのに一度も考えてなかった。なんてバカなんだ僕は…。最後の最後にバカを自覚して、またあちらの世界に送られるのかなあ？ 一日に何回も行つていいところではないよな、あそこは。

「あのさあ…その間抜けな顔されるとさあ…俺のやる気が落ちるんだけど…」

「最後にかけられる言葉が間抜けなんて言わせねえっ！ 絶対になつ！」

「最後と言つのはどういうことですか？ ……様」

「気付いてなさそうだから、言うけど…」

なんかため息つかれた…。みんなで憐れんでいるんだ？ 別に死ぬ時は笑顔で送り出された方がいいなあ…とこの時も思った。もうダメだ。ごめんよあ…

「右手触つてみたら？」

どういうことだよ？ 右手だろっ、右手っ！ 肩 腕 関節 その先はない。なにが良かったんだ？

「い、いや、そこじゃないからっ！」

「じゃあどこだよ！」

「なぜ右手首を触ろうとしないのですか？」

「ないものを触ろうとしてもむりだろ！」

「お前ってさあゝもしかして本当のバカか？」

「そのようにしか考えられないです。すみませんが……」

「なんでさあ！ みんなでバカ扱いすんだよ！」

「だって右手がちゃんと生えたのに死にそうなくらい叫んでいるから」

伊豆那と男が口をそろえてそう言った。

……？ ないけど？ どんなに触ってもないんだけど。

「あれれ？ みんな嘘をついてるんだね？」

「「お前の頭はイカれてんのかっ！」」

「さっきからどこ触ってんのって言いたいんだよっ！」

「なんかその言葉を聞くと『変態！』って言われてるみたいだなあ」

「ダメそうですね」

「ダメだなあゝこりゃあ」

「隆明様：正氣に戻ってください」

「なんでみんなでそんな顔すんだよ！」

「もうっゝうざったい！」

ズガズガ僕の方に向かって歩いてくる。次期神様候補生さん、そのような鬼の顔されても僕は困るんですが。もっと聖母のような微笑みでもいいんじゃないか？

伊豆那が僕の右手を掴んで伊豆那の心臓部分に運ぶ。

「ほら！ これ以上ないとは言わせないよ！」

「すみませんが、本当に胸がないですね……」

「ブチッ……なに考えてんじやああああ！」

グハアッ

思いっきり殴ってきた。さっきのハサミで殴られた時よりも痛てえ。

「な、なにするんだ！ 本当のこと言っただけだろ！」

うん？ そういえば、なくてもそれなりに手応えがあつたなあ。たぶん大きい方はやわらかいのだろうが、僕はまだそんな機会がないからよくわからない。

でも小さくても、なくてもそれなりに反発感が手の平で味わうことが出来た。手がないのに………手？

「なんであるの？」

「それはですね。私たちの扱う拷問道具はどれも殺すために作られたものです。しかし、よく考えてください。地獄に入った者は一生そこで死なずに暮らすのですよ。だから殺すためなのですが、生き返らせることも出来るのです」

「今回は隆明様の血が足りなくなつて死んでしまったと解釈できたのでしょうか」

「一応死んだつてことか？」

「たぶんそうなるなあ！」

今日何回死んでの、僕よ……。

「じゃあ、続きといきますかあ！ 紗羅！ もうめんどいから強い出しちゃつおうぜえ！」

「わかりました。拷問道具ではありませんが、使い勝手のいい地獄にいるのを出しましょう！ 地獄に申請。地獄の番犬の鎖を解き放ちます！ ……許可が下りました！ 幻獣『アメミット』！」

今度は男の後ろから、とてつもなく大きな魔法陣のような円が現れる。

「お、おい！ こんなのと戦わないといけないのかよ！？」

そこに現れたのは、頭はワニ、たてがみと尾と上半身が獅子、下半身はカバのような、絶対地獄にいるものじゃねえだろう的なのが出てきた。たぶんエジプトかギリシャ神話から持ってきてんじゃねえのか？

そして大きさが、男の三、四倍はある。なんてデカさだ。

「死者の魂を食べるかわいい幻獣なのですが、食べたその魂は再生されなくなってしまうので本当は鎖をつけているのです。しかし、今回はあなたは死んでいるわけではないので許可が下りました」

女の子がめちゃくちゃ変な幻獣にスリスリと顔をすりつけている。

「い、いや、僕はもう二回も死んでいるんだけど？」

「大丈夫だと思います。矛盾してますけど大丈夫です。保証もしますから」

「今していることが保証になるとお思いですか？」

「はい！」

ヨダレを出してこちらを見ている幻獣様がかわいらしいが、僕にとっちゃ無理だね。どう見ても僕しか見てない。一回も視線を外してない。

「じゃあ〜やろうじやねえかあ！」

「ほら、行ってください 花ちゃん！」

『花ちゃん』って言うんかい！ ミスマッチな名前をつけたもんだなあ！

「ガルウウウウウ！」

マジでヤバくないか？

「大丈夫ですよ、隆明様。『アメミット』は立つことは出来ても、歩くことはできませんから」

いやあ〜どう見ても襲ってきそうだけど…。

「てか、どこ行った？」

目を放した瞬間に消えた。跡形もなく。どういうことだ？

「上だ！ 隆明！」

上だと！？ 上を見上げたけど…どこ？

…… ああ、なんか点になつて見えた。目を凝らして良く見た。体の一部がライオンぽいから猫パンチ的な感じで僕に向かってくる。

…… 逃げた方がいいよな？ 逃げよう。逃げるんだ！

「スーパーーーーボインボインーーーーパンチーーーーだよ！花ちゃん！」

熱く地上から見守る女の子がもう、ですます調を使わないではしゃいでいる。

「その名前はやめろっ！ なんか誤解生むからっ！」

走る。走る。アレ？ 走れない。豪快な音が後ろから響いた後、味わったことのない地震が起きた。そのせいで、宙に浮かされる。

「うおおおっ？」

なんとかして受け身を取りながら地面に転がる。

「ガルウウウウウッ！」

あんな高くジャンプしたのに、全く怯むことなくこちらに向かって飛んできた。

やっとわかったが、足をバネのように使って、さっきは真上に飛んでいたようだ。しかし今回はこちらに飛んできている。避けれない。

「こんどこそあてるのよ！」

と言つてるときにはもう叩かれていた。

だいぶ飛ばされ、土煙を上げながらようやく止まる。せ、背中がぁす、すれて痛い……。

「うっ……」

目を開けた時にはもう目の前に、ワニの頭が見えた。

「あ、やばいかもしれません……」

遠くからそんな声を聞いたような気がした。や、ヤバいつて？

「グルウウウ……アアアア」

大きく口を開けて僕を食べようとしている。マジかよ。本当に死者の魂を食いに来たんじゃねえか？

とにかく後づ去る。もがいて、もがいて、もがきまくる。しかし、大きな口ではそのまま覆い被されてしまう。そして地面を掘りながら僕を飲み込もうとした。

ああ無理だ。僕はここまでの人生らしい。さっき言ってたが、たぶん神様の力でも食われた魂を再現し直すのは無理があるのではないかと思う。相手が幻獣だしね。もう足がビクビク震えてしまってる。動けない。今度こそ終わりだな…。

「

」

なぜか何も言われてないはずなのに何かが聞こえた。聞いたことのある声、僕の心の奥を見透かされているような言い草をしていないが、僕の心を覆ってくれる暖かい声でもあった。

しかし、僕は周りから切り離されたかのように目からも、耳からも、鼻からも何も情報が運ばれなくなり、暗闇が広がった。

第2話 第8章

「おに～～～ちゃん～～～！」

得体の知らない物が背中から抱きしめられた……にしたい。

「早く起きてよう～～～！ このふかふか～～～ちゃんが横にいても起きないなんて損だよ～～～！」

ウザい。ハッキリ言っただけやまだ。

彼女は僕の妹、穂積真桜。

まだまだ小学生の面影の残る童顔をして背も低いのだが、中学生二年生である。髪は少しウェーブのかかったツインテール。二重まぶた。頬や唇は張りのある弾力にほのかな紅さが顔全体を引き立てている。

だがしかし、どう見ても幼さが出まくりのこいつは、出るところは出ている。

まあ～～～もう中学生だから出ててもおかしくはないはずだが、マジで背中から抱きつかれてその部分が押されると、

「ねえ～～～！ 別に数か所に軽い打撲で済んでるはずなのに！」

耳元からささやくように言ってくる。もうこれはマズイ……。耳の中に息が入ってきてくすぐったい。

一応、背中側にいるので目を開けてもバレない。だから状況確認を試してみた。

まず見えたのは日は沈みかけ、橙色と黒の境目が見受けられる窓だった。目が動かせる範囲で他の様子も見てみたが、壁は汚れのない真っ白。近くには、台の上に花瓶があるのが見えるが花はない。寝ているから、下にあるの白い布はベッドだと思う。

ここはたぶん病院だ。たぶんね。

たぶん今回もちゃんと生き返ることが出来たようだ。バンザイバンザイ……やめよう。それでどうしようか？

「早く起きてよう～～～！」

がっちりと僕にしがみ付く手がさらに胸のところで縛って、出ていくところが当たり、むずかゆくなってくる。

さすがにマズイ気がしたため、起きたような仕草をする。

「ああ！ やつと起きたあ！ ねえお兄ちゃん！ 私のことわかる？」

「ううううう」

「ど、どうしちゃったの？ 打撲だけだって先生が言ってたのにやっぱ、頭のどこかヤバくなっちゃったのね！ ど、どうしよう！ テレビみたいにチョップすれば戻ってくるかなあ？ もう一か八かだよな？ とりやあああああ！」

「人はそんな単純なものじゃねええつ！」

まとわりついてた手が離れたため、やつと動くことが出来る。

振り返ると彼女は大胆に立ち膝で、こちらの頭に向けて手刀を振りかざしてくる。とても力が入ってるように見える。これってテレビを直す時の何倍もの力じゃないのか？

「お兄ちゃん！ 覚悟おおおつ！」

「お前は何を狙ってたあああつ！」

顔面を守るために手で白刃取りで受ける。

「唸るし、どこか異常なところがあるわけでもないし、残るなら頭が一番効果的じゃないかなあと思ったのに！ なんですぐ普通に戻っちゃうの〜？」

「特に異常なところはないから！ さっきのは冗談！ 冗談なんです！」

全然信じてない顔をしている。なんとかして手刀を押し込もうとする。

「じゃあ打撲だけなのになんで寝かされてんのかなあ！ どっかしら悪くてご家族に報告が出来ないと判断されたのかなあ？」

「僕に言われても知らないから！」

「じゃあ今から聞こう！ 今すぐ！」

「もうちょつと待ってるって！ 別に周りに機械とかないでしょ？」

たぶんそんな悪くないと思うから」

「そう……。でもなるべく早く見てもらうためにナースさん呼んでくるね！」

部屋を出て行ってしまった。

ナースさんを無理やり連れてくることだけはしないで欲しい。
なんだかまだ、眠足りない気がしたから目を閉じた。

「少し騒がしいので静かに安静にされていただけませんか？」

……。おいどういうことだよ……。

目を閉じて数秒。

「待ってください。なんでここにいるの？ エイルさん？」

「すぐそこにいたから来てもらったの」

目を開けたらそこには、天使だと言っていたエイルさんがいた。ナース服で……。

「知り合いだったの？ お兄ちゃん」

「ま、まあ……ね。いろいろとあったから」

たった今さっき会ったなど言えない。

「もう少し安静しておいてください。すみませんが、妹さんは退出してもらってよろしいでしょうか？ 少し確認作業があるので」

「事故についてですか？ ならお兄ちゃん」
な、なんだ？

「くれぐれも……世間から見放されるようなことはしないようにね？」
最近の女子は顔が笑っていても、目は怒っているというのが流行りなのか……。

「大丈夫です。私はどんなことをされても返り討ちにしますから」

「頼もしい……！ だってさあ、お兄さん。がんばってね……」

「元々やるつもりはねえっ！」

「バイバイ……」

「もう出てけえ！」

部屋を出ても笑顔で頭を出し続けた。こんな笑顔見たことないほどだ。悪い意味で…。

「さて、どこまで覚えているか確認します」

ベッドの上に正座で座る。

「～さんは近くの椅子に座る。」

一応だが、さっきの戦いは覚えている。ヘンテコなカップルに襲われて、最終的に花ちゃんが僕を食った？と思う。

「花ちゃんに食われたことまで覚えてんだけど…」

「何のことでしょう？」

「……」

真顔で言われても、こちらの反応の仕方がわからねえ！

「ジョークです」

「……」

すんなり言いやがった！ 必死に何か言ってやろうとしていたのに！

「そんなことはどうでもいいんです」

「だったら早く済ましてくださいっ！」

この人まで僕をもて遊ぶのか？ いったい世の中はどこまで僕に理不尽なんだ！

「なんとかして、あの幻獣に食われる寸前、助けることができた」

「なんとかして？」

「その辺は詮索しないでください。それです、飲み込みが早くなりましたね。感心しました。先ほどまでは『夢を見ていたんだ！』

って吠えていたはずですが、この数時間でここまで変わるにはある意味すごいですね」

「そういうものでしょう…。もう慣れたんです。慣れさせられたんです。慣れさせたのはエイルさんたちじゃないんですか？」

そつたる絶対にさあ…。朝から交通事故に会わせる準備をしていたんだし。今日一日で僕の人生が目まぐるしく変わってしまった。

「そうですね。私たちのせいで～様に不快感を感じさせてしまっ

たのは確かなようですね」

「今もだよ！」

「しかし、しょうがないんです」

「なにがですか？」

よくわからない。

「どんなことがあっても絶対なんです。 隆明様のパートナーとして伊豆那が人生を変えていかなくتهはいけないんです」

「それはさつきも聞きましたが。それになんて、僕の人生を変えなくてはならないのですか？ 何かしらの別の理由があるのではないんですか？」

戦闘する前に伊豆那が僕のところで修行することを話した。そしてその行いが僕の為だと言っていたが、あの男が言っていたように一人よりも全体のことを重視した方がいいのではないかとそう思う。

そしてなにより人生を変えなくてはならない理由が全く出てこない。そこまでしてはいけないのか？ 抽選で選んだとか言っていたが、僕のことで失敗しているなら別の人でも本当に良かったのではないだろうか？

「神はこの世界のあらゆるものに対して平等です。しかし例外と言うものがあるんです。その例外は、今この世界に何十人という少ない者たちなんですが……」

「それに入っているのが！ 隆明なんだよ！」

突如、扉を豪快に開けて、堂堂と歩いてくる。ナース服で。全然に会ってない。おままごとか？

「隆明。あの駐車場で言ったことはちゃんと覚えているよね？」

「一応は」

微妙だが覚えはある。エイルさんが本物の天使だということ。

「……変なこと考えたよね、今！」

「いいえ！」

即応。なかなかの反射だったと思う。だってやましいことなんて何にも考えていなかったから。

「まあいいや。それでエイルさんが話したことだけど、『幸運児』と『不幸児』ぐらいは覚えているよね？　そしてあのときは誤魔化したけど、本当はその『不幸児』のなかでも最下位なんだ、隆明。だから選ばれたんだ」

もう、何言われてもすんなり納得できる自分がいる。さっきまでの頭がオーバーヒートにもならず、ああそうなんだ…の要領になってしまっている。これは本当にマズイ。

「話は変わるけど、神様についてちよつと話すね」

「それは私が話します。どうせ……が話してもわからなくなってしまうので」

そこは賢明な判断です！　エイルさん。

「神様の力は無限ではないんです。有限なんです…。どういう意味かわかりますか？」

「全然見えてこないですけど。そんなだけで何かわかるんですか？」
無限じゃなくて有限なだけなんだろ。それほど変わることでじゃないんだろうか？

「駐車場で話したことですが、どうして神が入れ替わる理由はちゃんとわかっていますか？」

「……神様の力がなくなるからと言っていましたよね？」

「ちゃんと理解されているようですね。安心しました」

そんなに僕は低レベルなのか？

「それです。神の力がなくなる理由は……様にも関係しているのです」

「別に僕とあまり関係が無さそうなんですが」

「それがチヨーあるんだよ！　自覚がないだけ」
ベッドに突っ込んでくる。

「まず神は、神になった瞬間からこの世界の維持のために、神のなにかにある能力を全て出し切るんです。その期間は神それぞれであり、百年たったとしても持つ者もいれば、一年も持たない神様もいるんです」

「そんなに神様はか弱いんですか？」

「たいていほとんどの神は同じぐらいの力を持つことは出来ます。しかし、神にも不幸な方がおられるのです」

……神様がそんな状態じゃ、本末転倒じゃないか？

「ある年に、特別な物が生まれてきます。それは神の能力を吸い続ける物たちなんです」

「そいつらのせいで神は人間でいう1秒に、この世界に放出する力の量が変わるんだけど……今年はとてもじゃないが相当な量が流れ出ているんだ！」

結構深刻な顔を始めた。長身男との会話で泣きそうになっていた泣き顔とはまた違う顔だ。どうしても自分たちでは何も出来なくて悲しくなっている顔だ。

「そいつらとは言ってはいけません！」

「でも……っ！」

「彼らはこの世界にとってまた必要なのです。……様も」

「僕もですか！」

「そうです。……様はこの世界にとっても重要な物なんです！　なくてはならないんです！　必要なんです！」

僕は何もした覚えがない。

僕はこの世界のゴミだと考えてもおかしくないほどの自堕落な生活を送って来た。

小さい時から両親と比べられて、小学生ではイジメに会い、中学生では落ちこぼれになり、今、高校生になって僕は、周りから人を避けて生きるようにしていた。

そんな毎日を築きかけていたはずが、今日一日で変えられてしまった。

こんなにも崩れやすいものだったのか。

こんなにも粉々になってしまうものだったか。

こんなにもつまらない人生を過ごしていたのか。

こんなにも恐怖し怯えて動けなくなってしまうことがあったのか。

そんなことに気づかされることを僕は嫌だった。

嫌だからそんなのに会わないようにしていた。

というよりも最初から回避した。

逃げていた。

横じゃなく。

後ろへ。

後ろへ。

どんどん逃げる。

周りはどんどん遠ざかっていく。

周りは走り去っていく。

僕はもう進めなかった。

前に。

前に進むことが出来なくなっていた。

それはいつからかと言われても僕はわからない。

わかるわけがない。

わかることなどできない。

わかっているのかもしれないけど、わかりたくない。

第2話 第9章

そうやって僕は生きてきた。

心の中で泣いている自分がいることに気付きながら。

心の中で泣いているときは幼馴染がいた。

心の中に。

いたけど僕はなるべく一人でいたかった。

「どうして泣いている時にいるの？」

そう聞いたことがあった。

心にいる幼馴染に。

「それは私が悠美香ちゃん。悠美香ちゃんが私だから理解できない。」

「そうだろうね」

そうだろうさ

「いつか理解できる時が来るよ」

来てくれるの？

「来るじゃあゝおかしいね」

なにが？

「行かなくちゃいけないということ」

僕は行きたくないよ

「いつか」

いつか？

「いつか進まなきゃいけないんだよ」

待っててもいいんじゃないの？

「立ち止まっちゃいけないよ」

なんで？

「そのうち」

…？

「そのうちわかる日が来るよ」

わかるの？

「わかるんだよ」

そういうもんかな？

「うん」

逃げちゃだめなの？

「だめ」

立ち止まっちゃいけないの？

「だめ」

歩いた方がいいの？

「立ち止まるより歩いた方がいいよ」

走った方がいいの？

「そこまで焦らなくていいよ」

頑張らなきゃいけないの？

「頑張った方がいいんだよ」

努力しなきゃいけないの？

「努力した方がいいんだよ」

泣いててもいいの？

「いいんだよ」

笑った方がいいの？

「それはわからないや」

わからないの？

「むずかしいんだよ」

むずかしいんだ

「うん」

僕はどうしなきゃいけないの？

「ただ、前を向いて歩くだけでいいんだよ」

前に壁があつたら？

「乗り越えちゃえ！」

前に崖があつたら？

「飛んでっちゃえ！」

前に

「もううつるさい！ 自分で考えたら！」

……。

心の中まで僕は邪魔者扱いされるとは……。

はい！ 変な回想終わり！

一応言つときますが、このことはちゃんとあったことなんです！

知らないうちに、僕はいつもあの世界にいつのまにか引きずり込まれている。いまだに僕はあの世界に、どうやって行くか、どんな世界なのか全く知らない。

……で、

「なぜ…僕が必要なんですか？」

「それはまだ言う時ではありません」

聞けることが少ない…。

「えつとじゃあ…特殊な物たちのせいで神の能力がなくなるのはわかったけど…別に能力がなくなっても大丈夫じゃあ…」

「全然っ！ 全然大丈夫じゃない！」

伊豆那がとにかく僕の肩を掴んで揺さぶってくる。あああああああ。

「説明がまだでしたね。すみませんが、伊豆那。やめてあげてください。」

「フンっ！」

「すみませんでした。それですね。神の能力がなくなると寿命がなくなるのと同じなのです」

「もしかして…」

「神は死ぬのです……そして現神は伊豆那の父親的存在なのです」

妹を連れて僕は病院を出た。病院でちゃんと合っていたのだ。僕の推理？はちゃんと合っていてよかった。

医者にもう一度診てもらって最初に言われたのが

「…あ、ああ、あああたまはぐだだだあだあいじょうぶぐぶおぐぶお…」

「先生？ もうそろそろですかね？ お茶の間の時間」

「とてもナイスバディなナースが先生にそう言った。」

「うほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおつ！」

「……」

スーパーサ ヤ人にでもなったのか？

「いつもこの感じなので気にしないでください」

「はあ」

そんなわけで外で待つていてくれた妹を連れて帰路についている。

「そういえばなんで僕がここにいることを知っていたんだ？」

「あたしはね。お兄ちゃんのことなら、何でも知っているんだよ？」

「あんまりストーカー扱いことはやめておくんだぞ。そこまでして
いると将来が危ういな？」

「……うう」

な、なんで泣いているの？

「お兄さんがあたしのことを思ってくれたあ」！

「……」

ダメな妹だ。いつから壊れてしまったんだろうか。こんなことでさえ泣いてしまうなんて、どんなに涙もろいんだよ…。

「…強くなれよ、妹よ…」

「お、お兄ちゃーん！」

「抱きついてくんなあ！」

思いつき腕にしがみついてくるなんて、この年になっても童顔な理由はここにあるのかもしれない。

「早く帰ろ？」

「おう!...?」

電子音が鳴る。ケータイの着信音だ。幼馴染からの。

『もしもし? そっちに...ちゃん迎えに行った?』

「ああ。ちゃんと来てるよ」

『あのさあ。たぶんそんなにひどくはなかったから、大丈夫でしょ? だからそのまま家に帰って準備でもしておいて! ママはおばさまと会ったから一緒に買い物してるんだって。それでもうそろそろ買い物が終わるって』

「わかった。というか愛里子は邪魔だったよな?」

愛里子と言うのはお母さんの名前。幼馴染のお母さんと区別をするためにそう呼んでいる。

『まあいつも通りでおもしろかったらしいよ』

いつも通りというのは、愛里子はその店の商品を使って何かしらの芸をするというなんとも店にとつて、はた迷惑な行いをする事。いつもやめると言っているのだが、今回もやってしまったらしい。帰ったら叱つとかないといけない。

「そう言えばお前は?」

「なにが?」

「事故のあと、どうしてた?」

『隆ちゃんが救急車で運ばれた後、警察に事故の事情聴取されて、今終わったところ。なかなか終わらないから疲れちゃった』

「大変だったんだな。まあ帰ったらおいしい物をごちそうするよ」

『うん。じゃあ早く帰ろう!』

「そうか。じゃああとでな」

『うん。あとでね』

電話を切る。

「お前、悠美香から聞いてたんだな?」

「まあね...」

「まあいいか。とにかく早く戻って何を作るか考えないとな?」

そつえばなんであいつは僕が病院にいることを知っているんだ?

第2話 第10章

「……」

どうしてこうなってしまったんだ？

「隆明！ その取って！」

「意外な特技があつたもんですね」

「このカレーなるものは素朴な味で故郷を思い出しますね」

「この肉柔らかいなあ！ どうなってるんだあ！」

「やっぱり自慢の息子よ」

「なんで私よりも早く上達してるのよ」

「お兄ちゃん！ ああーん」

「隆ちゃん！ ほらほら！ ああーん」

「一気に口に運ぶなあーぶぐつえ」

……今から説明する。したくないけど。

帰った後、外にテーブルやイスを準備して待っていた。

アウトドア系の親父が残っていた使い勝手のいい物ばかりだ。

言っとくがまだ親父は死んでない……と思う。

そのあとすぐに、お母さんたちも帰って来たため、すぐに調理を始めた。

柔らかいローストビーフにするための仕込みを最初にやっておく。

元々、カレーを作つといたので温め直す。

今回は精米ではなく玄米を使う。

ナポリタンやたらこ入りパスタをフライパン二つを使って素早く作る。

なるべく愛里子は手伝わせない。妹も。手伝わせたら大抵の物を黒こげにされてしまう。焼かなくてもいい物でも…。

しかし幼馴染と喜里子さんはとても良く動いてくれる。なりよりも彼女たちはいつも二人で料理を作ることが多いから手慣れている、

僕よりも効率がいいかもしれない。

「痛っ！」

やはりこういうやつが出てくるもんだ

「つまみ食いしてんじゃねよ！」

盗人のごとく皿に盛り付けた料理を愛里子が手で取ろうとする。

「お兄ちゃん？ あたしはいいよね？」

お母さんの後ろから妹がこそそと出てくる。

「なんで『あたしはいいよね』だ！」

「ええええええええ」

「うつさい！ とうかこつちでまた食うんじゃねえ！」

「『ええええええええ』」

「二人でハモるな！」

邪魔だし、どつか遊んでいろつつうの！

そしてなんとか協力して残りの2人がよだれを垂らしまくるほどの
おいしい数多くの料理を作り終えた。

「さて、食べましょうか？」

「ほら。その皆さんも食べよう〜！」

皆さん？ 愛里子、誰のこと指してるの？

「いやあ〜バレてたかあ！」

「おいしそうだな！」

「頂いてもよろしいのですか？」

「これはすごいですね！」

おいおい…。なんでお前ら四人が仲良くうちの屋根にいるんだよ！
順に長身男、伊豆那、エイルさん、次期閻魔様。

見つかったから隠れる必要がなくなったのか、こちらの庭に飛び降りてくる。

女子3人はこちらの世界の人じゃないからわかるが、長身男よ…お前は3階から飛び降りたらどっかしらの骨が骨折してもおかしくな

いんだぞ。

「この人、さつき病院で見たよ！」

妹がなんでなんで？という顔でエイルさんに話しかけに行った。

エイルさんが対応に困っている。ホント、迷惑のかかる妹でスミマセン。

「『こんなに背が大きいなんて』」

お母さんたち二人で長身男を見て驚嘆している。

そしてこっちを見る。

「『……』」

別に僕と比べなくていいだろう！

「…どうしようか？ 料理は足りるよね？」

「…量的にはそれなりに作つといたからたぶん大丈夫」

幼馴染は不審者四人組に戸惑っていたが、別にそこまで変でない？
ことがわかってからは、料理の量が足りるか気になっていた。

そして、せっかくイスを用意したが、みんな立ってワイワイ騒ぎ始めた完全に宴会状態に突入してしまった。

「こんなに大勢で盛り上がるのも久しぶりね」

「ああ。たまにだが、こんなのも悪くはないんじゃないかな」

愛里子も普段は、なかなか家族で食べる時間がいつもないため、今回のようなことがとてもありがたいと言ってくれた。

「なあ？ さつきのことだが、殺すまでは思ってたからよお！
！そこはわかってくれるとありがたいぜっ！」

男がそう言ってきた。

別に根は悪くはないらしい。だが中身はわからない。腐っているかも…。

「そちらの次期神様」

「の候補だ！ まだ決まってるからな」

次期閻魔様がそう言った後、横から伊豆那が割り込んでくる。別に細かいことはいいんじゃないか？

「わかりましたから。それでですね、私たちの戦闘は一時中止した

いのです」

「話し合っただんですか？」

「まだ少しだけです。なるべく時間をループさせないで欲しいのはやまやまなんですけどね…。だけど何日間かは別にいいですから」

「そうですね」

僕もあまりループされることは賛同できないが、今すぐやめてくれとも思わない。

「後はですね、花ちゃんがあなたを食おうとしたことを謝ります」

「そ、それは別に大丈夫だから。謝んなくてもいいから」

「でもさあゝ！ お前にそんな力があつたとはなあ！」

「…？ なんのことだ？」

周りを見るとなんかゝゝと閻魔様の顔が卑屈っている。怪しい…。

「お前気付いてないのかあ？ 花ちゃんに食われグフォッ！」

「あらゝすみません。服についたシミを取ろうとして、ついっ！」

「私も、私も！」

「グフォッ！」

「…なんか怪しくないか？」

シミは拭くだけでだいぶ取れるが、殴るほどの力が必要なのか？

「っんなわけで、盛りあがって行こうぜえ！」

生き返るの早っ！

なぜか急に歌を歌いまくる長身男。どこからカラオケボックス持ってきた！

せっかくのきれいな着物を着ていた次期閻魔様は、先ほどの男が勢いよくコップの中身をこぼし汚れたので、着物を脱いだ。そのため、だばだばな服を着ている。しかし大いに楽しんでいるようだ。

妹は腕から離れない。なぜか幼馴染を睨んでいる。

お母さんは踊りまくっている。なんでサンバ？

ゝゝさんはお茶を啜りながら、温かい目でこちらを見守っている。

「おゝゝい。そこで何してんの！ 早くこっちに来な！」

次期神様候補のゝゝは、うれしそうに笑っていた。
今日の中で最高に見れて良かった笑顔かもしれない。
もう訳のわからなくなったこの会は夜中まで続いた。

エピソード（前書き）

続きがありますが、まだ執筆しておりません。

それって、続き、ないんでしょうとか言わないでください。

一応、構成だけはあるので書ける時に書きたいですね。

ですが、ここで終わりです。

エピソード

あのカップルは帰ったが、残りの二人は寝泊まりするところがないらしく、そのまま居候するとか言い出した。

「だって寝床がないと生きていけないんだよ？」

「その通りです。隆明様、お願いします」

いや、俺に聞かれたって……。

「別にいいわよ〜。部屋も余ってるしね〜？」

なんの問題もなくすんなり決められる母を尊敬したくない！

妹も了承し、二対一で僕の負けとなった。

今日は色々あったから、そのまま寝ようとしたが自分の部屋の前には伊豆那がいた。

「ちよつといいか？」

「なんかあったか？」

「話しときたいことがある……」

「じゃあ、早く入りな……」

なんかあったか？ 不満そうな顔でもないし、なんだろう

「私は隆明のために来たと言ったけど、実際は現神を長生きさせようとするための副作用でしかないことを言わなくてすみませんでしたあ！」

部屋に入って、椅子が一つしかないからベッドに座ってもらった。

「別に謝るほどでもないんじゃないか？」

こいつは助けたいんだろ。今の神を。

「何かしたい時なにかをする。そうやって私は現神に育てられたの」

「父親だと言ってたよな？」

「本当は違うけどね。人間で言う父親的存在ではあったんだよ。そして、私のようにある日、次期神様候補として選ばれた。彼は選ば

れたからにはやりきると言っ、無我夢中に何でもやってた。元々、頭は良く回るほうで、神の補佐もしていたこともあったと言っていた。だから慣れていたんだろうけど。しかし今回…予想外のことが起きてしまっ、あとのくらい持つかわからないけど、なるべく長生きして欲しいんだ…」

「僕たちの…せいなのか？」

「そうは言っ、ない！ 隆明はなにもしてない！ なにもしてないんだ…」

そんなに自分に言い聞かせているところを見てしまっ、かわいそうになっ、てきてしまっ。

僕は実際やっ、覚えもない。

運命だっ、たと言えないんじゃないかと思っ。

僕を生んだお母さんに罪があるわけでもない。

それでも

「別に、僕に全部吐いちゃっ、てもいい…」

「え？」

「お前が僕に可能性があると思っ、たから、こっ、ちの世界に來たんだろ。」

なら全部言っ、ちゃえよ。頼み事でも愚痴でもなんでもいいんだよ。まず否定することはやめよな？」

僕はあることに氣付いた。

こいつはさっ、き何と言っ、たか？

「なんにもしてないんだよ！ まだなんにもしてないんだよ！」

「…どういっ、うこと？」

ふう。今度はこっ、ちの番だ。

「ちゃんとわかるように説明するから聞いとけよ！」

「……うん」

「二人とも僕の人生に干渉した。それは裏からだけだっ、たよな？」

「まあそうだけ…。氣付かないまま不幸兒から抜け出して、ちゃんと残りの人生も送れるようにサポートするつもりだっ、た。だけど、

だけだね…。どんなにやつても隆明は不幸の道を歩いてしまった。他の不幸児たちは少しでも救いの手を出せば、うまく不幸からの脱出が出来たのに。なんで。なんでなんだ！　なんでかわからないんだ！」

僕的能力はホントに、スゴイのかもしれない。

僕に関わった周りの奴らを不幸にさせている。今現在も。

完全にグシャグシャの噺り泣き。これを見てしまうと耐えきれない。近くににいる者はたぶん何気なく、僕から離れていったのだろう。

僕の内なる物が何なのか知らないけど、本能がそう叫んでいたんだろう。

だからこいつも本当は逃げたいのかもしれない。

次期神様候補だから絶対なにもかもうまくことを運ばなきゃいけないと思っていたんだろう。

だが、こんなにも予想外のことばかり起こす僕が怖くなったんじゃないか？

今にでも僕から離れて、また違う神様の能力を吸う人を探していい方向に持っていこうとするんじゃないか？

だけどな？　今は泣いてていいんだよ。

これからなんだよ！

「否定はするなよ！　僕にはまだ知らないことが多い。多いんだよ。たぶんお前と僕とでは桁外れだろうな。…でもな？」

なんか言うのが恥ずかしい。

しかしここは頑張るんだ、僕よ！

「まだ始めたばかりなんだから、もうちょっと頑張ろうぜ！今日の朝から今までは、たった2人だけで僕の人生を変えるための作戦を練っていたんだろ？　だったらさあ！　僕もまげて欲しいな！」

「…？」

目は充血して、頬にはまぶたにたまった涙が出てきている。それを何回も手で拭いてしまつて肌が荒れ始めている。そんな噺り泣きもしないでくれ！

そんな状態だとなんだかな。その〱心の奥でなにかが暴れているような感じになってしまっただよ！ああもうっ！

〱の頭に手をポンツとのせて

「僕も仲間に入れて欲しいの！ 三人で頑張ろうよって言うてんの！」

「えっ…グスツ…だ、だつてパートナーだつて」

「そうやって言ったのはお前だが、僕はまだ認めてなかっただろ？」

「…うん」

「それで僕は、お2人さんのお仲間になりたいわけだよ！ わかったか！」

思いつきし頭を撫でまくる。

「な、なななにをするんだ！」

「で、認めてくれんのか？」

「それはその〱」

「どっちだ！」

「えええええい！ 黙れ黙れ！ 認める！ 認めてあげる！」
なぜ上から目線なんだ？ まあいいか。

「じゃあ早く寝ろ！ 明日から大変になるんだからさ！」

切り替わりはやっ！

「じゃあじゃねえ！ お前はここで寝るな！ 僕の聖域から出ていけ！」

「イヤだつて言っただら？」

「早く出ていけ！」

ドアを開けて、そのまま放りこむ。そしてすぐに閉じる。

『開けろう！ あけろ！ 開けろおおっ！』

「うっさい！ 近所迷惑だ！」

知らん知らん。また明日。このことは明日済ませよう！

とにかく疲れたからもう寝よう！

そして、今に戻る。

現在僕は今、学校に向かっている。

朝から僕は、老けたおばあさんの顔を見るなんて不幸で仕方ない。それに朝食を食わず、弁当を作る時間もなく、そのまま出てきてしまったため昨日と同じで、コンビニによって買わなくちゃいけない。また、昨日のように事故することは避けたい。

どうしようか。行く道を変えてみるとか、走ってみるとか、他に何かいい案はないだろうか？

「では、私たちにお任せください」

…なぜ横にいるのエイルさん？ 本当にこの人の気配が感じられなかった。

「それでなんですか？ 僕は急いでいるんで！」

「そのまま学校に向かってくださって結構です。私たちがサポートしますんで」

「えっと、弁当を届けてくれるということですか？」

「その通りです」

これは結構ありがたい。じゃあ、ありがたく。

「お願いします！」

「承知しました」

学校の方に向けて歩き出す。結局、遠回りになってしまった。

「とてもとても楽しい日々が始まります」

後ろからそんな言葉が聞こえた。楽しい日々って？

そして僕は昨日に引き続き、今までにない人生を歩んでいくことになってしまった。

エピソード（後書き）

この話は、一回削除します。

なので、ここまで読んでくれた人に感謝したいですねw

これからも小田浩正をよろしくお願いします。

今は、『電車内は人の中』で頑張ります。

ですが、もう一つ作品を考えています。

載せるかは、まだわからないのですが、知らないうちにふと、載せているかもしれません。

なので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305ba/>

神がここにいる

2012年1月5日21時52分発行